

碩 士 學 位 論 文

韓國人日本語學習者における
婉曲表現の理解についての分析



濟州大學校 大學院

日語日文學科

青山智代子

2005年 8月

韓國人日本語學習者における
婉曲表現の理解についての分析

指導教授 李 昌 益

青山智代子

이 論文을 文學 碩士學位 論文으로 제출함

2005年 8月



제주대학교 중앙도서관
JEJU NATIONAL UNIVERSITY LIBRARY

青山智代子の 文學 碩士學位論文을 認准함

審査委員長 _____ 印

審査委員 _____ 印

審査委員 _____ 印

濟州大學校 大學院 日語日文學科

2005年 8月

**An analysis of understanding the euphemistical
expressions in Japanese for the Koreans
who learn Japanese**

Chiyoko Aoyama

(Supervised by Professor Chang-ik Lee)

A thesis submitted in partial fulfillment of the
requirement for the degree of Master of Arts

Department of Japanese Language and Literature

GRADUATE SCHOOL
CHEJU NATIONAL UNIVERSITY

2005. 8.

<한국어초록>

韓國人日本語學習者における婉曲表現の理解についての分析

青山智代子

濟州大學校 大學院 日語日文學科

指導教授 李昌益

이 논문 주제인 “완곡표현의 이해”는 대학원에 입학하기 전부터 내가 안고 있었던 과제였다. 일본어를 가르치면서 어떻게 하면 일본어다운 일본어를 가르칠 수 있을까 하는 것이 일본어 원어민 강사로서의 고민이었던 것이다. 또한 어떻게 하면 한국 사람처럼 한국어를 말할 수 있을까 하는 것이 실생활에서의 고민이기도 하였다. 나는 일본어가 모국어이기 때문에 한국어를 사용할 때 일본어식 표현으로 한국어를 사용하곤 하는데, 그렇게 하면 일상생활 속에서 오해나 의사불통상태가 자주 일어난다. 그것이 일본어를 모국어로 하는 사람끼리는 쉽게 서로가 이해 할 수 있는 표현(즉 예매한 표현, 간접적인 표현이나 완곡표현)을 사용해서 대화를 하다보면 문제가 생긴다는 것을 말한다.

그렇다면 이것을 반대로 생각해 보자. 일본어학습자는 일본어를 모국어로 하는 사람이 일상에 쓴 완곡표현을 일본어를 모국어로 하는 사람처럼 자유롭게 사용할 수 있을 것인가. 일본어를 모국어로 하는 사람이 사용하는 완곡표현은 이해하기 어려운 부분이 아닐까? 모국문화와의 차이라고 말할 수도 있지만 이런 표현도 배워나가지 않으면 진정한 소통은 성립되지 않을 것이다. 제2언어학습의 참다운 즐거움이란 그 나라의 언어를 충분히 이해하고 또 자유롭게 사용할 수 있는 즉 듣고 말하고 쓸 수 있다는 것이 아닐까?

그러므로 이 연구에서는 우선 일본어의 대표적인 특징·성질과 완곡표현에 관해서 일본어 안에서의 완곡표현, 예매한 일본어와 완곡표현, 연상을 기조로 하는 완곡표현, 상대방을 배려하는 일본어와 완곡표현으로 나누어 고찰해왔다. 그 다음으로 일본어학습에 있어서 일본어 완곡표현 학습의 필요성에 대하여 고찰해 보았다.

그리고 더 나아가 일본어학습자를 대상으로 실시한 조사실험의 결과를 기초로 하여 완곡표현의 이해도에 대해 논술했다. 이 조사는 현재 일본어를 제2언어로 학습하고 있는 제주대학교 일어일문학과 2학년에서 4학년 학생 49명을 대상으로 실시한 것이다. 이 조사의 목적은 일본어를 제2언어로 학습하는 한국인 학습자들이 일본어의 완곡표현을 어느 정도 이해하고 있는지 또한 그 이해에 영향을 끼치는 요인은 무엇인가를 밝히는 것이었다. 그리고 조사에 있어서의 대화문이 가능한 응답 예를 기술해 그것을 참고로 해서 실험 결과를 산출하고 각 학년마다 결과와 고찰을 정리해봤다. 또 남녀별 결과와 고찰도 기술하고, 이번 조사실험에서의 학생들의 응답 등도 기술하였다.

그 결과로서 4학년은 완곡표현에 대한 이해도가 높고 2학년은 낮다는 것이 나타났다. 또 완곡표현의 이해에 영향을 끼치는 요인으로는 2개가 있는데 하나는 일본에서의 체류경험이고 또 하나의 요인은 학습기간으로 생각된다. 그러자 체류기간이 없고 학습기간이 짧아도 일본 드라마나 영화 등을 보는 학습방법으로 회화능력을 갖춘 자도 있다는 것도 주목해야 할 것 같다.

그리고 전체적으로 민정거리는 표현(皮肉表現)이 이해도가 낮았다. 이 민정거리는 표현(皮肉表現)은 언제나 연상이 동반되고, 일반 완곡표현보다 완곡도가 크다고 여겨진다. 일본어를 모국어로하는 사람끼리도 이해하지 못하는 경우가 있고, 또 다른 표현보다 실제 회화에서는 이러한 표현의 사용빈도가 낮다고 생각한다. 이러한 표현을 익히기 위해서는 일본인들의 민족성이나 문화 등의 이해가 없이는 어렵다고 볼 수 있다. 민정거리는 표현(皮肉表現)의 학습을 위해서는 담화학습 및 어용론적인 지도도 필요하다고 본다.

언어라는 것은 그 나라의 민족성이나 사회성에 밀접해 있기 때문에, 학습자에 따라 언어 습관이 차이가 있는 것은 당연하다. 일본어를 모국어로하는 사람은 완곡표현을 사용하는 습관이 있지만 외국인 일본어학습자에 있어서 완곡표현이라는 것은 학습하지 않으면 습득하지 못하는 것이다. 자기가 가지고 있는 모국어의 언어습관으로 제2언어를 구사한다고 한다면 과연 어떻게 될 것인가. 제2언어를 학습하기 위해서는 그 나라의 문화, 민족성 및 역사 등을 배경으로 해서 그 나라의 언어를 이해하는 것도 필요하지 않을까.

일본어의 특징·성질로 서술한 일본어의 예매함, 연상을 기초로 하는 것, 상대방을 배려하는 표현 등이 진정한 일본어라고 나는 생각한다. 이러한 일본어다운 일본어를 습득해 나가기 위해서는 완곡표현의 이해와 담화의 학습이나 경험이 필요한 동시에 일본문화나 민족성의 이해도 필요하지 않을까라는 생각이 든다.

<日本語抄録>

韓国人日本語学習者における婉曲表現の理解についての分析

青山智代子

済州大學校 大學院 日語日文學科

指導教授 李昌益

この論文のテーマである『婉曲表現の理解』は、大學院に入學する以前より私が抱えていた課題でもある。日本語を教えている中で、どのようにしたら日本人らしい日本語を教えることができるだろうか、これが私の日本語講師としての課題だったのである。また私の實生活の中で、日々感じていることが「どのようにしたら、韓国人らしい韓国語を話すことができるのか」である。日本語母語話者である私は韓国語を話す時には、日本語の感覚で韓国語を話してしまう。すると誤解や意志の不通が生じてしまうことが多々あるのである。それは日本語母語話者同士ならば容易に理解しあえる表現（すなわちあいまいな表現、間接的表現や婉曲表現）を使いながら、會話を進めていくと問題が生じてしまうということである。

それでは、これを逆に考えてみよう。日本語学習者は日本語母語話者が日常茶飯事に使う婉曲表現を日本語母語話者のように操ることができるのであろうか。日本語母語話者が巧みに使う婉曲的表現は理解しがたい部分ではないだろうか。母國の文化との差異であると言ってしまうまでも、このような表現も身につけていかなければ、本当の意味でのコミュニケーションは成立しないであろう。第二言語學習の醍醐味とは、その國の言葉を十分に理解し、また自由に操れる、すなわち聞けて話せて書けることではないだろうか。

それゆえ本研究では、まず日本語の代表的な特徴・性質と婉曲表現について、日本語の中の婉曲表現、あいまいな日本語と婉曲表現、連想を基とする婉曲表現、相手を思いやる日本語と婉曲表現として考察した。次に日本語學習において今後どんな指導が必要なのかということで、日本語學習者と日本語談話を學ぶ必要性と題して考察を進めた。ここでは、日本語談話の必要性、發話行爲の實際、談話構造からみ

た發話行爲、日本語學習者における語用論的處理の必要性として考察した。

そして、さらに日本語學習者を対象にして実施した調査實驗の結果をもとにして婉曲表現の理解度について論述した。この調査實驗は現在、日本語を第二言語として學習している濟州大學校日語日文科の二年生から四年生の學生49人を対象にして実施したものである。この調査實驗の目的は、日本語を第二言語として學習している韓國人學習者たちが、日本語の婉曲表現をどの程度理解できるのか、またその理解に影響を及ぼす要因は何であるかを明らかにすることであった。そして、調査實驗における對話文の可能な回答例を記述し、それを参考にして實驗結果を算出し、各學年ごとに結果と考察をまとめてみた。また男女別の結果と考察も記述し、さらに今回の調査實驗での學生の回答例も記載した。

その結果として、四年生は婉曲表現の理解度が高く、二年生は低いということが明らかになった。また婉曲表現の理解に影響する要因としては二つ考えられ、その一つは日本での滞在経験であり、またもう一つの要因は學習期間であろうと考えられる。しかし滞在経験がなく學習期間が短くても、日本のドラマや映画等を見るという學習方法から會話能力を身につけている者もいるということにも注目すべきだろうと思われる。

そして全体的に皮肉表現の理解度が低かった。皮肉表現には常に連想が伴うもので婉曲度の大きいものであると考えられる。日本語母語話者同士でも理解できない時があり、また他の表現よりも實際の會話の中では、皮肉表現の使用頻度が低いのではないだろうかとは私は考える。そのような表現が日本語學習者にとって理解が困難なものであるということは仕方がないことであろう。このような表現までも身につけるには、日本語母語話者の民族性や文化等の理解なくしては困難だとも言えるだろうし、コミュニケーションとしての談話學習の必要性もあるのではないかと、また語用論的指導も必要ではないかということである。

言語はその國の民族性や社會に密接しており、その母國語ゆえにその言語習慣の違いがあることは当たり前である。日本語母語話者は婉曲表現を使う習慣があるが日本語學習者にとってはそれは學習しなければ習得できないものなのである。自分がかかっている母國語の言語習慣で第二言語を操れるかといえば、それはどうであろうか。第二言語の學習をすすめていくには、その國の文化・民族性さらには歴史などをバックボーンとしてその國のことばを理解していくことも必要なのではないだろうか。

日本語の特徴・性質で述べた、日本語のあいまいさ、連想を基とする、相手を思いやるということは、本当に日本語らしきであるだろうと私も思う。この日本語らしい日本語を習得していくには、婉曲表現の理解と談話の學習や経験が必要であるのと同時に、日本文化や民族性の理解も必要なのではないかと考えられるであろう。

目 次

韓国語抄録	i
日本語抄録	iii
1. 序論	1
1-1 研究目的とその意義	1
1-2 先行研究	2
II. 本論	4
II-1 日本語の特徴・性質	4
①日本語の中の婉曲表現	4
②あいまいな日本語と婉曲表現	6
③連想を基とする日本語と婉曲表現	1
④相手を思いやる日本語と婉曲表現	5
II-2 日本語学習者と日本語談話を学ぶ必要性	7
①日本語談話の必要性	17
②發話行為の実際	19
③談話構造からみた發話行為	2
④日本語学習者における語用論的處理の必要性	3
II-3 調査実験	26
①調査実験の目的	26
②調査方法(a被験者 b材料 c本調査実験の手続き)	6
③調査実験における對話文の回答例(a誘い b依頼 c断り d皮肉)	1
II-4 結果と考察	4

①四年生の結果と考察	5
②三年生の結果と考察	6
③二年生の結果と考察	7
④男女別の結果と考察	1
⑤調査実験での学生の回答例(a誘い b依頼 c断り d皮肉)	1
Ⅲ. 結論	57
参 考 文 献	60
Abstract	62



I. 序論

I-1 研究目的とその意義

この論文のテーマである『婉曲表現の理解』は、大学院に入學する以前より私が抱えていた課題でもある。日本語を教えている中で、どのようにしたら日本人らしい日本語を教えることができるだろうか、これが私の日本語講師としての課題だったのである。また私の実生活の中で、日々感じていることが「どのようにしたら、韓国人らしい韓国語を話すことができるのか」である。日本語母語話者である私は韓国語を話す時には、日本語の感覚で韓国語を話してしまう。すると誤解や意志の不通が生じてしまうことが多々あるのである。それは日本語母語話者同士ならば容易に理解しあえる表現（すなわちあいまいな表現、間接的表現や婉曲表現）を使いながら、會話を進めていくと問題が生じてしまうということである。

これは私が日本語講師として仕事を始めたばかりの時のことである。學生から晝食を一緒に食べませんかと誘われ、私が「今日はちょっと…」と文末をにごした表現で返事をした。これは日本語母語話者ならば、「ああ、今日は都合が悪いんだ。」「時間がないみたいだ」と聞き手のほうでもある程度、これは断っているんだと連想しながら會話を進めていき、「それでは、今度時間のある時にでも一緒にたべましょう」と落ち着いていくことだろう。ところが學生はこの「ちょっと…」という表現が婉曲的な一種の断り文句だとは思わなかったらしく、「もう、授業はないのに約束があるんですか」「明日はどうですか」「その次はどうですか」と質問を浴び続け、結局断ることができなかったのである。

日本語の談話の構造分析¹⁾の筆者のボリー・ザトラウスキーもこんな経験談

1) ボリー・ザトラウスキー、『日本語の談話の構造分析』p. 1

を語っている。ポリーが滞日中に友人同士で温泉に行くことになり、一緒に行こうと誘われたわけだが、ある一人に「ポリーさんは論文で忙しいから、行くのは大変でしょう」と言われて大変ショックを受けたそうである。その理由は米国の習慣では、人を誘う際にこのような表現を用いるのは、相手が自発的に断るように仕向ける時だけだそうである。この発言をした日本語母語話者は断るよう仕向けたのではなく、「論文で忙しいけれども一緒に行きたいですね、大丈夫ですか」という意図をもって相手を思いやったうえでの發話と考えられるのである。

しかし外国人にとってこのような婉曲的表現は理解しがたい部分ではないだろうか。母國の文化との差異であると言ってしまうまでも、このような表現も身につけて行かなければ、本当の意味でのコミュニケーションは成立しないであろう。第二言語學習の醍醐味とは、その國の言葉を十分に理解し、また自由に操れる、すなわち聞けて話せて書けることではないだろうか。

それゆえ本研究では、日本語の代表的な特徴・性質と婉曲表現について簡単に述べ、日本語學習において今後どんな指導が必要なのか、考えていく。さらに日本語學習者を対象にして實施した調査の結果をもとにして婉曲表現の理解度について論述しながら、今後の日本語會話指導にあたっての課題も考えていきたい。

I-2 先行研究

近年の日本語教育では、コミュニケーション能力の育成が重視されるようになり、學習者のコミュニケーション能力をいかに伸ばすかということが、日本語教育研究で注目されている。それにともない中間言語の研究対象も、學習言語の音聲・形態・統語論のレベルから、意味・語用論のレベルにまで広がってきている。特に學習者が、依頼・謝罪・感謝・断りなどの發話行爲を、第二言語でどのように表現し、またそれが日本語母語話者のものとどのよう

に異なるかを調査する、語用論レベルでの対象研究が近年行なわれている。

依頼・要求行動(柏崎 1992、植田 2002)や勧誘(ボリーザトラウスキー 1986-7)、感謝(秦 2000)、断り(カノックワン・ラオハブラナキット 1995、生駒・志村 1992)、議論の場における言語行動(李 2001)、日本語の感情を含む発話に関する研究(甲斐・田淵2002)等の先行研究は談話分析を中心に行っているものであり、日本語母語話者と学習者の会話の比較分析もなされている。これらの先行研究から共通していえることは、実際の談話を収集・分析する必要があるということと談話に基づいた教授法を提案していることである。また日本語母語話者は、自分の意図や意志をストレートに表現する自己主張優先型というよりも、相手を配慮する話し方を好む傾向が見られ、相手との衝突はできるだけ回避するという傾向が見られたということである。

それでは日本語の特徴や性質というものはどのようなものであり、それが学習者にとって十分に理解されているものなのであろうか。自分の意図や意志をストレートに表現しない日本語、すなわち婉曲表現を好んで使う日本語とは学習者にとって、理解しにくいものなのだろうか。

世界の言語の中でも婉曲表現が多いと言われている日本語を、どうやったら日本語母語話者のように理解し、また日本語母語話者と対等に会話がスムーズに運べるようになるのかということが教える立場からの課題ではないだろうかとも考えるのである。

それゆえに本研究では、現在日本語を学習している大學生を対象にして婉曲表現の理解度を調査し、実際に婉曲表現を理解し会話のなかでスムーズに使うことができるのか否かを考察していきたいと思う。

II. 本論

II-1 日本語の特徴・性質

II-1-1-① 日本語の中の婉曲表現

この論文のテーマである婉曲表現とは、はたしてどのようなものなのであろうか。辞書等で「婉曲」ということばを探してみると、次のように記載されている。

廣辭苑：表現などの遠回しなさま。露骨にならないように言うさま。

「一に断る」、「一な表現」

學研 國語辞典：遠回しに言うようす。それとなく言うようす。

日本國語大辭典：①表現の仕方は遠回して、穏やかなさま。角立たないで、やさしく言い表すさま。

②文法で、判断・命令・感動などが、断定的あるいは直接的になるのを避けて語調をやわらげる効果をもつ表現。多くの場合、推量の形をとる。

またインターネットで検索してみると、「婉曲語法」ということで提示されているものがある。

ふき出しのレトリック²⁾：婉曲語法とは、遠回しに言うことの總称です。この「婉曲語法」に含まれる表現の多くは、「響きの悪い言葉」を「響きの良い言葉」に置き換えるレトリックとなります。つまり、話しをしている相手にとって不利益になることや不快感を与えるようなことを、ぼかして表現することになります。多くの場合、この「婉曲表現」は、

2) http://www.geocities.jp/balloon_rhetoric/example/euphemism.html

他人との衝突を避けるために使われることになります。

このようにみていくと、「婉曲表現」とは遠回しな言い方だということができるであろう。しかし、この遠回しな言い方とはどのようなものをいうのだろうか。婉曲表現＝遠回しな言い方という、一般的に依頼や誘いの場面を思い浮かべることが多いであろう。これらの表現は日常茶飯事に使われており、日本語学習においてもその文型や会話練習がすでに取り上げられている。話し手から依頼や誘いを受けた聞き手は、承諾するか、断るかを選択して返答しなければならない。承諾する際には問題はないだろうが、断る際にはここで婉曲表現を使うのが日本語の一般的な使い方ではないだろうか。日本語の談話の構造分析³⁾の中においても勧誘に対しての断りについて「思いやり發話」ということばを提示して、勧誘者の立場を考慮する發話がみられると論じている。また、言語表現の状況的使い分けに関する社会心理学的研究⁴⁾においても、「断り語句」ということばを用いて対人配慮の言語表現が存在すると論じている。

このように考えていくと婉曲表現とは二つの用法があるのではないだろうかと思はれるのである。その一つは依頼や誘いといった聞き手に對しても利益となるプラスとなるような使い方である。これをここではプラス的用法とよぶことにする。そしてもう一つは断りや皮肉のように聞き手に對して不利益や不快感を与えるようなことを遠回しに言う表現である。これはここではマイナス的用法とよぶことにする。断りについては上述したように、聞き手に對しての配慮があって遠回しの表現をするという論説もある。しかし皮肉については、これも婉曲表現かと考える人もいるかもしれないが、私はあえて婉曲表現に加えることにする。それでは皮肉とはなにかと辭書で探してみると

廣辭苑：遠回しに意地悪く弱点などをつくこと。あてこすり。

學研國語大辭典：相手の欠点・弱点などを直接に指摘せず、遠回しに意地悪く

3) ボリー・ザトラウスキー、『日本語の談話の構造分析』p.76, p.79

4) 岡本眞一郎、言語表現の状況的使い分けに関する社会心理学的研究 p.182

避難すること。また、そのことば。あてこすり。

日本語大辞典：意地の悪い言動。遠回しに意地悪をいったりしたりすること。

また、そのさま。あてこすり。

とあり、相手を攻撃するものというニュアンスをもっている。しかし、皮肉をアイロニー (irony)として調べていくと、アイロニーとはなんであるかを明確に定義できないという壁にぶちあたってしまうのである。⁵⁾けれども共通していえることはアイロニーはポジティブな感情の表明を装ってネガティブな感情を伝えようとするものであるということである。そして、さらにアイロニーは、字義どおりの發話よりも攻撃的ではないという議論も存在するとしている。⁶⁾それはアイロニーは字義どおりの批判よりも話し手の批判、怒りの度合いを低く、抑制の度合いを高く感じさせ、アイロニーの受け手への侮辱の程度を低く感じさせ、對人關係への影響を少なくしているということである。また、実際には非常にひどい事態であるからこそ、それを和らげて示すためにアイロニーが用いられやすい、という解釋のほうが妥当する可能性があるとしている。このようなことから私は皮肉を婉曲表現の一つとして考えても良いであろうとし、マイナス用法の中に加えたわけである。

そして、これらの用法を日本語母語話者は巧みに操りながら會話を促しているのだろうと私は考えるのである。

それではこの婉曲表現と他の表現との関わりはどのようになっているのか、考察していきたいと思う。

II-1-② あいまいな日本語と婉曲表現

日本語はあいまいな言語だという見方が日本語母語話者自身にも定着している。

5) 岡本眞一郎、ことばの社會心理學 p.127

辻大介、アイロニーのコミュニケーション論 p.2

6) 岡本眞一郎、ことばの社會心理學 p.144

ただし、理屈っぽく考えると、日本語に限らず、人間の使う言語はどの言語でも多少なりともあいまいさを含んでいる。数式のような人工的なものとは別として、普通に言語と呼ばれるもの、すなわち日常言語（自然言語）では語と他の語の意味の境界がはっきりしていなかったり、一つの語の意味内容が確定しにくかったり、あいまいである。またその語を連ねた文章や会話にも、何らかのあいまいさがつきまとうのである。さらに言語表現には、物事を氣むずかしく考え、正確・厳密にしたがるものと、思考や表現があいまいでも構わない、あいまいなのがよいとするものの差があることは認められよう。日本語の場合は、後者の性格を濃く受け継いでいると考えられるだろう。そしてその日本語のあいまいさは、様々な場面で活用され、好まれているものなのである。

(1) 古池や 蛙とびこむ 水の音

松尾芭蕉

これは松尾芭蕉の有名な俳句であるが、この一句を聞いてもこの池が100メートル四方もありはしないことや、巨大な蛙が何匹もとびこむわけではないことが、日本語母語話者には当然のように了解されているわけである。しかし、このようなあいまいさが「美」とされているだろうと私は考えるのである。世界的に知られている俳句は、あいまいさを一つの技法としてことばを巧妙に操っているものではないかと私は考える。これはあいまいさがことばの美的表現の一つとして人々に親しまれているものではないかと私が考え、例として挙げてみたものであるが、日本文学の中にはこのようなあいまいさが多用されているだろうと私は考えるのである。それでは談話においてはどうか。

東京での「けっこう広い土地」が五十坪であったりすることは、ヒバリーヒルズの住人には予測しようもあるまいし、「かなりの混雑」が東京のラッシュ時の殺人的な電車のものであることなど、サハラの遊牧民にとっては想像を絶してもいるだろう。つまり日本語母語話者は多くの場合、仲間内で理解しあうたぐいの言葉しか持ち合わせていないため、外部の人々に對するあいまいさをかもし出

しているのではないだろうか。

また、否定疑問文への答えが欧米と日本ではまったく逆になるという事実からみても、自己中心的な欧米流の思考法と外部指向的な日本語との違いにはかならないのではないだろうか。そのうえ、そもそも日本語母語話者はきっぱりと「ノーと言えぬ」やさしき日本語母語話者なのであろう。つまり、日本語母語話者のあいまいさは多分に、他人への配慮からも生じているわけであるといえるだろう。

このように日本語におけるあいまいさと言われるものは、大別すれば「暗黙の了解」と「他人への配慮」という二つのものに由来しているように思われる。

「暗黙の了解」はまさしく了解されている以上、それを言葉にしないのは当然のことであって、それがあいまいと映るのは外部の目に對してだけである。あるいはまた「他人への配慮」によって物言いを微妙に変えるところなど、自己主張ばかりに終始する西洋風の言葉づかいよりも数段すぐれているとも考えられるのではないだろうか。

제주대학교 중앙도서관

けれども、それゆえにこのような表現が出てしまうことが多用にあるのである。これは高名なドイツ文學者が、外國からの仕事の依頼に對しての會話だそうである。⁷⁾

(2) 日本人ドイツ文學者「私に出来るか出来ないか、自信をもって言えないが、お引き受けしたい。」

ヨーロッパの友人「出来るなら出来る、出来ないなら出来ないと書けばいいではないか。」

日本語母語話者にとっては、このようなパターンの表現が身につけているので、抵抗なく話し、書いてしまうし、讀んでも聞いても奇異に感じることはないのである。可能・不可能の境界づけをぼかし、あいまいに表現し、それを通じて

7) 芳賀樫・佐々木瑞枝・門倉正美、『あいまい語辭典』 p. 2

相手に對する強い自己主張をも控える。結果的には婉曲的に「はい、引き受けます。」と言っているのである。それが日本語母語話者にとっては「ゆかしい」とさえ感じられるのである。

たとえばこのような表現を考えてみよう。

(3) 「朝とは何時から何時までのことですか。」

と聞かれた場合、どのように答えればいいのか。気象廳の定義⁸⁾によると「日の出からだいたい午前九時ごろまで」とのことだそうだが、この「朝」の時間帯は、早起きの人と寝坊のひと、また住んでいる地域（東のほうが日の出が早い）によっても大幅に違ってくるだろう。ある調査によると、

(4) 「朝、一番にお伺いします。」

などという時の「朝一番」は、九時という人が53.1%、九時半が14.2%、10時が10.8%だったそうである。同様に「夕方」とは4時という人が31.4%、5時が35.2%、6時が15.7%、というように分かれてくるのである。⁹⁾

さらにまた

(5) 「ちょっと出かけてくるよ。」

と、この「ちょっと」というものも30分という人が37.6%、60分が20.6%、10分が12.1%となっているそうである。¹⁰⁾

このように、時間を表す表現はあいまいさをともなっており、またそれで10分にコミュニケーションが円滑に行われているわけである。もちろん、待ち合わせをす

8) 芳賀綾・佐々木瑞枝・門倉正美、『あいまい語辭典』 p.39

9) 芳賀綾・佐々木瑞枝・門倉正美、『あいまい語辭典』 p.39

10) 芳賀綾・佐々木瑞枝・門倉正美、『あいまい語辭典』 p.39

る時には、

(6)「明日の朝、東京驛の前で待っているからね。」

というような約束をする人はいないのである。どこまで時間表現を限定するかは、脈絡によるのである。

またこのような場合もよくあることであろう。子供が親からこんな仕事を言いつけられた時の会話¹¹⁾を考えてみよう。

(7)「お風呂のお湯をいっぱいになるまで入れておいてね。」

「湯飲みに、お茶をいっぱいまで入れておいてね。」

親の言うとうりにした子供は、ここでたいてい叱られるのである。

(8)「いっぱいと言ったって、あふれるほど入れることはないのよ。」

辞書でみると「いっぱい」には「一定の容器、場所などのものが満ちている様子」¹²⁾の意味もある。この意味であるならば子供の解釈のほうが正しいということになる。しかし叱られた子供は「いっぱい」の意味が時と場合によって変わることを知るのである。「いっぱい」とは100%とか80%とかの絶対的な分量ではなく、相対的な分量であることを学習するのである。これは日本語のあいまいさというよりも、程度を表す語（たとえば副詞や形容詞・形容動詞などの一部）に共通するあいまいさであろう。

以上、あいまいさも日本語の一つの特徴・性質としてみてきたが、このようなあいまいさが私は、婉曲表現と陰・日向のように常にかかわり合っているものであると考えるのである。そしてこの日本語のあいまいさは、遠回しの表現すなわち

11) 芳賀綾・佐々木瑞枝・門倉正美、「あいまい語辞典」p.44

12) 金田一春彦編、「學研 國語大辭典 第二版」 學習研究社

婉曲表現を發するときには様々な場面で活用され、また日本語母語話者には好まれて使われているものなのではないだろうかと考えるのである。

II-1-③ 連想を基とする日本語と婉曲表現

日本語會話において、あいまいな表現を使う時、聞き手に連想をさせながら會話を進めるという場面が多数みられるということも一つの特徴といえるであろう。また婉曲表現を發するときにおいても、この連想というものは重要なポイントとなっているだろうと私は考えるのである。ではどのように、連想をさせながら會話が進んでいくのか、考えてみようと思う。

日常生活の中で、我々が人と話し合う場合には、様々な状況が考えられるが、どんな場合にでも、それぞれに話す目的が存在するものである。自分自身の考え、あるいは、感情をひとりごとのごとくに表出するという場合もあるであろうし、あるいは、友人に対して情報を伝えようという場合もある。さらには、話し手が聞き手を行動させようとする場合もあり得る。このように、人がある發話行動をする裏には必ず目的があって、發話行動というものが成り立っているわけである。ここで考えなければならないのは、この場合の發話目的と發話されたことばの形が必ずしも一致していないということである。気軽に考えれば、ある一つの發話されたことばの形は目的と一致していると考えやすいが、事實はそれほど簡単ではないようである。

たとえば、我々が部屋の中において窓の外を眺めているとして、こんな會話¹³⁾を考えてみよう。空が曇ってきて雨が降り始める。それを見て、

(9) a-①「あ、雨だ。」

と獨り言のように雨がふってきたことを口にすることがある。聞いている人が誰もい

13) 水谷修、「話しことばと日本人—日本語の生態—」 pp. 26~28

なくてもこの行爲は行い得るわけである。これが、雨が降って来たという事実を家族の誰かに伝えようとする時、

(9) a-②「あ、雨だよ。」

というような、明らかに人に伝えているという形が変わってくる。さらに、雨が降って来た、外に干してある洗濯物を取りこまなければならない、取り込んでくれという意志を伝達する場合には、

(9) a-③「雨だよ。洗濯物を取りこんでよ。」

といった表現を取ることになる。しかし、雨が降ってきたから洗濯物を取りこんでくれという言い方をする場合には、必ずしも、洗濯物を取りこめという表現はしない。



(9) a-④「雨が降ってきたよ。」

だけで、聞いている人に、だから取りこまなければならない、取りこんでくれよと伝えようとすることがある。そしてこのような用法は婉曲表現と考えていいだろう。勿論、場合によっては、

(10) a「雨だよ。」

b「だから何なの。」

a「洗濯物が干してあるじゃないか、わからんのか。」

といったような形の会話も運ぶこともあるのだが、この場合でも、最初の發話の「雨だよ」は、實は、取りこんでくれということを示唆していたわけである。その

ことが理解出来なかった反問に対する答えとして、「わからんのか、雨で洗濯物が濡れるではないか。」という發話に結びついてくるわけである。

このような發話の目的と表現の形の差は色々な場面で見つけ出すことが出来る。次のような會話¹⁴⁾を考えてみよう。数人の人達が仕事をしている場に一人の上司が入ってきて、

(11) a-①「寒いねえ。」

とつぶやいたとする。この「寒いねえ」は、たまたま上司が外で感じた寒さの實感を口から漏らしたという場合もあり得るが、

(11) a-②「外は寒いんだよ。」

ということ伝えようとする場合、またさらに、そこにいる人達に何らかの特定の行動を起こさせようとして言う場合もある。後者の場合、その上司の意志は、次のようであると言えよう。寒いなと思いながら部屋に入って来た、すると部屋の中も寒い、ひょいと見ると窓が開いている、こんなに寒いのになぜ窓を開けたままにしておくのか。そこで本来ならば、

(11) a-③「寒いじゃないか、その窓を閉めてくれ。」

といったような表現を選べばよいのであるが、人間関係への配慮をしないでの發話行為は實行出来ないわけで、何となく直接に命令をするという形を取らず、「寒いねえ。」という表現によって相手はその意図を斟酌し、そして、

(11) b「あ、そうか、窓が開けてあった。」

14) 水谷修、「話しことばと日本人—日本語の生態—」 pp. 28~29

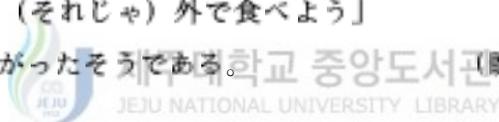
ということに気づき、次の行動に移ってくれることを期待する場合もあり得るわけである。このように直接的な表現よりも、間接的もしくは婉曲的表現を使って會話を進めることが多用にあると考えられるのである。

では実際に現代作家の小説の中から會話の部分抜き出してみることにしてみよう。

(12) 晝食の間中、講義がつづき、ついに日が暮れて午後七時になってしまった。夫人は、とびきり聰明な人だが、ただ度を超してまじめなひとだから、夕食の支度をどうしよう、といらいらしていた。しかし眼前の“講師”はまだ晝食を食べつづけているのである。夫人は思いあまって、「夕食の時間になりましたが、どうしましょう。」という、その日の彼女の受講態度がよかったのか、玄文叔氏は上機嫌で

「ほなら（それじゃ）外で食べよう」

と立ちあがったそうである。(耽羅紀行 p.220)



このような例文は理解が簡単であるといえよう。文中の夫人は夫の講義に對して婉曲的に「やめさせよう」という心理が働いていることは一目瞭然である。

(13) 入ってるると熱いけど、出ると寒いでしょ

ひげまで凍っちゃったよ

(生 p.108)

この例文においては、「ひげまで凍っちゃったよ」ということで髪が凍るほど寒い中、「どうして露天風呂に入らなければならないのか」という不満と、「もう風呂から出よう」という意志を間接的に婉曲に伝えているのである。

(14) 「僕は個性的な女性が好きだ」とか、

「お嬢さんには興味なくて」(ルンルンを買っておうちに歸ろう p.39)

(14) の「興味がない」という表現は間接的に「嫌い」だと言っていることと同じであり、婉曲的に「私はお嬢さんタイプの女性は好きだはない」という表現と同じであると言えるだろう。

勿論、このように間接的な表現、婉曲表現で相手に訴える、行動させようとする傾向の人ばかりではなく、逆に、命令や依頼、希求を直接的に表現する形式を選ぶ人もいる。このような表現形の選擇は、個人差の問題としても考えられるが、しかし、個人の問題として以外に、一つ一つの言語の中の一般的傾向として考えることもできるであろう。客観的にその証明をすることはまだ出来ないが、たとえば英語の場合にも、このような表現意図と実際に發話された表現形式の差というものも確かに存在するが、日本語の場合ほどは激しくはないように思われる。人に何か行動を依頼する時には、我々日本人はほとんどの場合、それが特別に許された間柄ではない限り、まずその要求を明確に示す表現を選擇するのは躊躇することが多いと言えよう。

以上、連想を基とする日本語として日本語の特徴・性質をみてきた。日本語においてはこの連想を働かせなければ、相手の發話の意図を十分に理解しがたいということが多大にあるのである。そしてこの連想性がなければ婉曲表現は成り立たないといっても過言ではないほど、この二つのかかわり合いは強いものであるだろうと私は考えるのである。

II—1—④ 相手を思いやる日本語と婉曲表現

日本人がことばの形、ことばそのものに依存して相手に伝えるという方法を好まないのは、日本人の考え方の中に重要な位置を占める、相手への思いやりとことがあるだろうと考えられる。この思いやり、相手を傷つけないということ、あるいは、その裏側の事実として考えられる、相手に甘えるといったような心理状況が、言語の表現形式を直截的なものにはさせていないのだろう。極端に言えば、相手に負担をかけることについては、ヒントとしての表現（聞き手に

連想させる表現)で相手の意志による行動を求め、期待し、時にはそれを通じて、ことばで全部を言い表さなくても分かってもらえるという喜びを味わう、そのような傾向を産み出しているのであろう。あいまいな表現や婉曲表現を用いての会話は日本語母語話者が相手を思いやるがゆえの、一つの特徴であると考えてもいいのではないだろうか。

さらにまた言語の形 ことばそのものがコミュニケーション活動の中で果たす役割、換言すれば、言語の機能負担度というものが、言語によって異なっている可能性があり、また、同一言語内たとえば日本語使用者の間にあっても、個人差あるいはその人の属している集団、社会による差も当然予測される。少なくとも、ことばの形が行動目的と一致するものであるという考え方は成り立たないわけである。

それゆえ外国人と日本語で会話をする時に、かなり流暢な日本語を話す外国人との間にも、コミュニケーションギャップがしばしば起りうるのである。その代表的なものは、こちらは断ったつもりでも、相手はそう受け取ってくれない場合である。

(15) 外国人「先生、明日お宅をお訪ねしたいと思います。」

日本語母語話者「明日ですか。明日はちょっと忙しいので…」

こんな場合、日本語母語話者なら「ああ、そうですか。それではいつ頃伺えばよろしいでしょうか。」などと会話はよどみなく進んでいく。ところが外国人との場合には往々にして、そこで数秒から数十秒間の「空白の時間」ができてしまうことが多いのである。こちらとしては相手を思いやって文末をにごしてやわらかく断ったつもりなのに、相手が理解していないことが見て取れ、もう一度はっきりと断る羽目になることが多い。たとえばこのようにである。

(16) 日本語母語話者「明日は忙しいので、家に来ていただいてもゆっくりお

話はできません。また別の日にして下さい。」

(15) のように「忙しいので…」の後に来る話者の意志は、聞き手に判断が委ねられる。日本語母語話者にとっては習慣的に何の抵抗もなく会話は進んでいくのだが、このような会話（直接的な表現を避け、遠回しな表現すなわち婉曲的な表現）は外国人にとっては、わかりにくい表現の一つといえるだろうし、ことばの背後にある心意まで見抜くことはかなり困難なことであると考えられるだろう。

このような他人を配慮する表現は、婉曲表現においても多用に現われると私は考えるのである。先述したように、私は婉曲表現には二つの用法があると考えている。一つは依頼や誘いなどのプラス的用法。そしてもう一つは断りや皮肉などのマイナス的用法であるが、このマイナス的用法を發する時には「相手を思いやる」心理が働いているだろうと私は考えるのである。



제주대학교 중앙도서관

JEJU NATIONAL UNIVERSITY LIBRARY

II-2 日本語學習者と日本語談話を學ぶ必要性

それでは日本語學習者にとって、日本語のどのような点が理解しにくく學習しにくいものなのかを考えてみようと思う。

II-2-① 日本語談話の必要性

(17) A: 「暑いですね。」

B: 「今朝は本当に暑いですね。」

(18) A: 「ちょっと、暑いですね。」

B: 「あ、すみません、窓を開けましょう。」

發話は何らかの機能を担い、發話によって意図が理解されている。例えば、(17)では發話「暑いですね。」は挨拶として機能している。(18)では、發話「暑いですね。」が、部屋を涼しくしてほしい、という願望や、窓を開けてくれ・エアコンをつけてくれ、等の要請として機能している婉曲表現である。

では、母語ではない言語でもスムーズに發話の意図が理解できるのだろうか。Aの發話に対して、日本語学習者は「いいえ、暑くありません」と答えるかもしれない。文法に則して形容詞の否定形で正しく答えたのだが、談話としては不自然だろう。形容詞文は知っているが、その運用を知らなかったケースである。また、發話の機能が文脈に依存することを知らずに挨拶機能を(18)にも適用したら、察しの悪い人だと思われかねない。

このように、日本語母語話者どうしなら容易に理解できる發話でも、日本語学習者には難しい場合が少なくない。日本語学習者が、文法として、ある言語形式の直接的な意味は学習しているにもかかわらず、それだけではうまくコミュニケーションできない場合があるのは、なぜだろうか。

日常發せられることばは、ある文脈の中で使われ、發話者の意図を表現すべく、何らかの機能を担っている。言語形式が表す直接的な意味だけでなく、その言語形式を使うことによって含意される意図も理解して、初めて言語は眞に理解される。言語を使用者との関係でとらえる語用論の世界である。これは子どもの言語獲得過程を考えてみれば察することができる。子どもは、日常の意味ある文脈の中で表現にふれることで、表現の形式と共に、その使い方を身につけていくのである。

一方、日本語学習者は学習状況の制約から、目標言語の語用論的側面が不足しがちである。限られた時間内の教育では、これまで、語彙や文の形式上の正確さが優先され、言語の運用面は後回しになりがちであった。言語形式(文型)は知っているとしても、使うべき文脈やその表現が示す意図や担う機能が把握できないため、教室外での実際の會話でうまくいかなくなる。円

滑なコミュニケーションには、言語の運用についてすなわち談話についても学ぶ必要があるのではないだろうか。

コミュニケーションの観点から、学習者が実際の会話場面でなぜうまくいかないかを検討していくと、問題が浮かび上がってくると考えられるだろう。それは談話にあるのではないだろうか。現実のコミュニケーションは談話の形をとっている。話しかけによって相手の注意を促し、話すべき内容を述べた後、相手が何らかの応答を示す、一連のまとまりがある。依頼や誘いなどのプラス的用法の婉曲表現の發話にしても、断りや皮肉などのマイナス的用法の婉曲表現の發話にしても、發話は単文の文だけでなされるよりも、まとまりをもった談話の中で發せられるはずである。どのように話しかけて注意を喚起し、表現したいことを切り出し、話を運んでいったらいいのか、場面や人間関係を考慮していかに適切な表現を選び出すかなど、談話に関する知識も必要なのではないだろうか。

これまでの「文—文法」の教育に加えて、談話の構造に関する「談話の文法」の教育も必要なのではないだろうか。そのためには、いかに談話が展開するかという談話の構造について、實証的な研究から体系的に把握する必要もあるであろう。

したがって、ことばを談話でとらえる観点が、言語習得において不可欠だといえるのではないだろうか。文脈のなかでの言語使用として、また文レベルを越えた發話や意図のまとまりとして、談話という単位をとらえることが重要であると考えられるのではないだろうか。

II-2-② 發話行爲の實際

發話によって意図を伝達することを發話行爲という。發話行爲には、依頼、謝罪、勧誘、感謝などがある。また發話行爲は、ある言語行爲（例：状況を述べる）を通して、婉曲的に別の言語行爲（例：依頼する）が行われる婉曲的發話も多い。ひとつの意図を表すにも多様な表現の可能性がある。

たとえば、日本語母語話者による依頼・要求談話の実際の調査¹⁵⁾から、發話行為に関する表現の多様性(表-1)が見出されている。この表を参照した理由は、婉曲表現という依頼表現を思い浮かべる人が多いのではないかと考え、また理解しやすいものではないだろうかと考えたからである。

《表1》 使用の実際から導かれる依頼表現の多様性

分類名(略称)	發話例
a. 直接的要求(直要)	「かぎを貸してください」
b. 協力	「かぎを貸していただけませんか」
c. 話し手の状況(s状)	「かぎを持ってないんですが」
d. 話し手の目的(s目)	「かぎを借りたいんですが」
e. 聞き手の状況(h状)	「かぎをお持ちですか」
f. 一般的な状況(般状)	「部屋あいてますか」
g. 許可	「かぎを借りてもいいですか」
h. 主題のみ(主題)	「かぎは(を)」
i. 話し手の可能性(s可)	「かぎ借りられますか」
j. 直接的宣言(直宣)	「かぎを借ります」

依頼の定型表現とされる協力を求める表現だけではなく、むしろ話し手側の状況・目的・願望や、場面の状況および主題などに言及することで、婉曲に間接的に表現する機会が多いとされている。また、それらの組み合わせで、状況や目的を前置きとして述べてから協力や許可を求める表現が使われる場面も少なくない。

(19) ファックスが動かないんですけど、見ていただけますか。

(20) 書類をコピーしたいんですけど、いいですか。

15) 柏崎秀子、「話しかけ行動の談話分析—依頼・要求表現の実際を中心に—」p. 8

(19) では話し手側の状況と協力を、(20) では話し手の目的と許可を表現しているわけである。このように実際の談話では、依頼の定型表現「～していただけますか」以外にも、心的態度や場面状況に応じて、發話の前提に言及することで意図が含意される婉曲的發話行爲が多用されていることがわかるであろう。

それでは次に、婉曲的な發話行爲の實際について考えてみようと思う。表—2¹⁶⁾は日常よく使われている表現を婉曲度の高い順に並べてみたものであるが、意志の弱さの順として、また断定きの弱い順として並べてみたものである。

《表—2》婉曲的發話の多様性

-
- a : …ではないでしょうかと思います。
(とても婉曲的で、且つ仮定も込められていて自信がない言い回し)
- b : …ではなからうかと思ひます。
(非常に硬い表現。論文・論説等に多用。口語では極少用。)
…ではないかと思ひます。
(…だと思ひますの婉曲で…だろふかと思ひますよりも、もっと自信がない。)
- c : …だろふかと思ひます。
(…だろふと思ひますの婉曲で更に仮定が込められる。)
- d : …だろふと思ひます。
(…だと思ひますの婉曲で更に仮定が込められる。)
- e : …かと思ひます。
(…だと思ひますの婉曲用法。)
- f : …だと思ひます。
(斷言的)
-

この表—2からもわかるように、日本語母語話者の話し手は心的態度や場面状況に応じて、その微妙な婉曲の程度を巧みに選擇し、發話行爲に結び付けているのであると考えられるであろう。

16) 教えて！goo (<http://oshiete1.goo.ne.jp/kotaeru.php3?id=866015>)

II-2-③ 談話構造からみた發話行爲

發話行爲の多様な表現は、通常、まとまりをもった談話のなかで發せられている。目的や意図との関係で、表現を選んだり談話のしかるべき箇所發話したりして、談話を展開していく。日本語母語話者及び學習者の談話¹⁷⁾をもとに、展開の仕方に注目して、非言語行動も含めて談話レベルで依頼の發話行爲をとらえ直してみようと思う。

日本語母語話者が話しかけるときは、まず相手を話の場に引き込むよう、「あのう」「すみませんが」等のことばかけや視線などの非言語的行動によって、何らかの働きかけを行なう。用件内容を突然述べることはしない。次に、相手に負担がかかりそうな内容や複雑な内容の場合には、前置き表現を用いたりポーズをおいて相手の様子をうかがう。「今いいですか」「ちょっと悪いんですけど」等の相手を配慮する(思いやる)表現も見られる。すでにこのことについてはII-1-③相手を思いやる日本語と婉曲表現で述べたが、相手への負担に絶えず配慮する特徴が認められるわけである。

そして、用件内容を提示する際にも相手への配慮が見られる。複雑な用件内容のとき、まず「～のことなんですけど」と主題を提示してポーズをおく、または婉曲的表現を用いて相手に内容に対する構えを作らせてから具体的な内容用件に入る。

以上から、日本語の談話は、絶えず相手への負担に配慮して、相手の反応を確かめながら少しずつ区切って進めていくという特徴も見えてくるのである。

それに對し日本語學習者は、複雑な用件内容でも主題を提示せずにすぐ具体的な内容を話し始めることが少なくない。また、日本語學習者の場合、挨拶的な言い方も多く見られることから、負担の配慮よりも親しさを表そうとするストラテジーを有する可能性も考えられるであろう。

17) 柏崎秀子、「話しかけ行動の談話分析—依頼・要求表現の實際を中心に—」 p. 4

II-2-④ 日本語学習における語用論的處理の必要性

人は言語を理解するために、図1に示されているようなさまざまな言語處理を、自動的に行なっている。¹⁸⁾

図1を参照しながら、このさまざまな言語處理を説明していくと、辭書的處理とは文を構成する個々の單語の處理のことを指している。たとえば

(21) あなたは今日、エクレアを食べましたか。

という質問に答えるためには、“エクレア”が何を指しているのかについての理解が不可欠である。この理解に可能しているのが辭書的處理である。また統語論的處理とは統語論的(シンタクス)知識を利用して文の意味を解析する處理のことである。たとえば

(22) 昨日、太郎で小説に讀んだ。

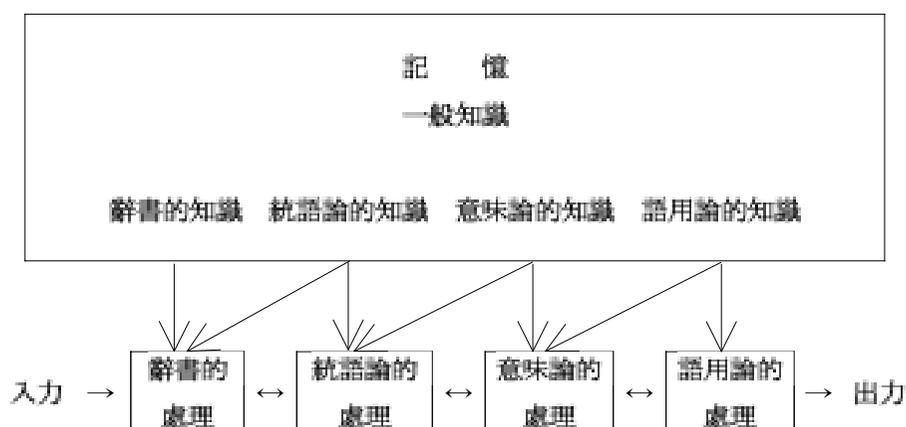
という文は文として容認できないという判断を可能にしているのが、統語論的處理である。さらに意味論的處理とは意味論的知識を利用して文の意味を解析する處理のことである。たとえば

(23) 無色透明のどす黒い怒りが、めらめらと音を立てて立ちすくんでいた。

この文は文法的にはどこにも誤りはない。しかし、正常な日本語感覺の持ち主であれば、この文は日本語として不自然だと判断するはずである。この判断を可能にしているのが意味論的處理である。

18) グリーン, J 『言語理解(認知心理學講座4)』: 言語處理のモデル

〈図1〉 言語処理のモデル



そして最後の語用論的處理とは發話の文脈に応じて發話者の意図を解析する處理のことである。たとえば會社で上司が日頃あまり勤務態度のよくない部下に向かって

(24) 君はほんとによく働いてくれるね。涙が出るほど嬉しいよ。

と言った場合、これは褒めことばではなく、「皮肉」だと理解するべきである。この理解を可能としているのが語用論的處理なのである

従来、第二言語の學習指導では、辭書的處理、統語論的處理、意味論的處理の指導に主眼がおかれ、語用論的處理の指導は輕視されてきた感があるようである。しかし今後はこの語用論的處理の指導も重視されるべきではないだろうか。

そこで、そのことを示唆する研究¹⁹⁾を紹介してみることにする。この研究では、20名の外國人留學生に表—3の例文のような8つの婉曲表現を呈示し、「あなたがBさんであるならば、かっこで空白になっている箇所日本語で

19) 松見・森、「外國人留學生における日本語婉曲表現の理解」

どう答えるか」を考えさせた。あわせて、それぞれの会話文に対する回答理由および発話者Aの意図を尋ねた。結果の分析では、日本語の学習期間の長さ、滞在期間の長さ、婉曲表現の有無、専攻領域の要因が婉曲表現の理解度（正答数）へどの程度影響を及ぼすかを調べた。その結果、婉曲表現の経験の有無および学習期間の長さの影響のほうが、滞在期間の影響よりも大きいことが明らかになった。このような結果は今後の日本語教育において、こうした婉曲表現も教材として積極的に取り上げることの必要性を示唆しているのではないだろうか。

このような研究結果を基に実際の日本語学習現場を見てみると、果たして談話の学習やそれにおける語用論的處理の指導がされているのだろうかという疑問が浮かび上がってくる。そこで、現在日本語を学習している大學生を対象にして、この婉曲表現の理解度の調査を行なってみた。

〈表—3〉 婉曲表現の例文



제주대학교 중앙도서관
JEJU NATIONAL UNIVERSITY LIBRARY

【誘い】

（場面）お晝に、ゼミが終わった後で。

A: 今夜、何か予定がある。

B: いや、特にないけど。

A: 賞は、君の好きなクラシック音楽のコンサート券が2枚あるんだけど。

B ()

【依頼】

（場面）朝、講義が始まる前の教室で。

A: 文學史のレポートをそろそろ書かないといけないね。

B: 今週の金曜日までだよ。

A: 君、何か役に立ちそうな本を持っていない。

B ()

II-3 調査実験

II-3-① 調査実験の目的

日本語を第二言語として学習している韓国人学習者たちが、日本語の婉曲表現をどの程度理解できるか、またその理解に影響を及ぼす要因は何であることを明らかにすることを目的とする。

II-3-② 調査方法

a 被験者：濟州大學校の日語日文學科の學生

(2學年 29名 3～4學年 20名 計49名)

二學年を多用するのは大學の授業の関係もあるが、この學年では日本語能力の差が表出するのではないかと推測したからである。

b 材料：8つの對話文を用いた。これらの對話文は

- 1)口語によるもの
- 2)社會的地位による上下關係をほとんど考慮しなくてもよい友人どうし
の間で聞かれるもの
- 3)聞き手が日本文化に對する深い知識を有していなくとも、語句や文の
意味そのものは容易に理解できるもの

という基準を満たすものであり、先行研究である「外國人留學生における日本語婉曲表現の理解」²⁰⁾で用いた婉曲表現を引用した。この婉曲表現を用いた理由は、すでに日本において日本語母語話者の大學生5名の予備調査を行ない、この5名中4名が一致して回答したということから信頼性があるだろうと考えたからである。そこで私自身も在韓日本語母語話者の5名に予備調査をしてみたところ、同じような結果が得られたので、この表現を引用することにし

20) 松見・森、「外國人留學生における日本語婉曲表現の理解」

た。

また、対話文の中で用いられる婉曲表現としては、聞き手がその婉曲表現を理解して次の行動を起こすことにより、話し手が何らかの形で心理的・物理的に利益を得る4つの表現、すなわち誘い、依頼、断り、皮肉の表現を取り上げた。そして、これらの表現が入った対話文8つを用いた。対話文は、常用漢字、及びひらがな、カタカナで表記され、1つずつ1枚のカードに印刷した。

c 手続き

実験は、被験者が在籍する大学の教室で学年別に行ない、被験者の有する日本語の学習環境を明らかにするために、予備調査として簡単なアンケートを行なった。(そのアンケート用紙は別添)そして以下のように実験調査を行なった。

- 1) 8つの対話文を1つずつテープから聞かせ、その対話文と全く同じ対話文を提示し、筆記によって求める。すなわち、
『これから、二人(A君とB君)の間で行われた日本語での対話を聞いてもらいます。あなたが君(さん)であるならば、かっこで空白になっている部分に、日本語でどのように答えるかを考えてください。そして、あなたが君になったつもりで、それをかっこの中に日本語で書いてください。ただし、漢字がわからなければ、ひらがなやカタカナ、あるいはローマ字、韓国語でも結構です。』
と教示した。
- 2) 1つの対話文の提示が終了することには、その対話文における回答の理由、とりわけ発話者であるAの意図についての回答もしてもらうことにした。(※本実験の教示と対話文提示後の質問は、被験者にあわせて日本語と韓国語で行なった。)

《予備調査における質問事項》

1. 日本語の学習歴

- ①日本語の学習をいつから始めましたか？

- ②どのように学習しましたか？

- ③學院に通った事がありますか？ (はい/いいえ)

- ④學院では日本語母語話者の會話を受講したことがありますか？
(はい/いいえ)
その期間はどのくらいですか？



제주대학교 중앙도서관
JEJU NATIONAL UNIVERSITY LIBRARY

2. 日本での滞在期間

- ①日本での滞在経験がありますか？ (はい/いいえ)
(1) その期間はどのくらいですか？

- ②日本でのアルバイトの経験はありますか？ (はい/いいえ)
(1) その期間はどのくらいですか？

(2) どんなアルバイトをして、その仕事内容などどんなものでしたか。

今回の調査実験に引用した8つの対話文

【誘い1】

(場面①) お晝に、A君の家で

A : 今、何時かなあ。

B : もうすぐ12時だよ。

A : そうかあ。ねえ、お腹がすいていない。

B : ()

【依頼1】

(場面②) 夕方、大学からの帰り道。

A : 明日の講演會にどうしても出席できないんだ。

B : じゃ、ぼく一人で行くことになるね。何か用事ができたの。

A : うん。でも、プログラムだけはほしいなあ。

B : ()

【断り1】

(場面③) 夜、電話で。

A : 用件は何だい。

B : 明日、引っ越しなんだけど、手伝ってほしいんだ。

A : そうしたいけど、今、腰が痛くてねえ。

B : ()

【皮肉1】

(場面④) お晝に、大学の食堂で。

A : 昨日頼んだ本を持って来てくれたかい。

B : ごめん、家に置いてきたよ。

A : またかい。君は本当に物覚えがいいねえ。

B : ()

【誘い 2】

(場面⑤) お晝に、大学の授業が終わった後で。

A : 今夜、何か予定がある。

B : いや、特にないけど。

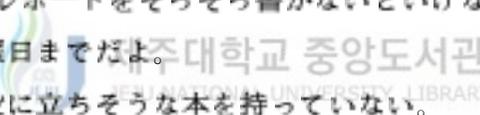
A : 實は、君の好きなクラシック音楽のコンサートチケットが2枚あるんだけど。

B : ()

【依頼 2】

(場面⑥) 朝、講義が始まる前の教室で。

A : 文學史のレポートをそろそろ書かないといけないね。

B : 今週の金曜日までだよ。 

A : 君、何か役に立ちそうな本を持っていない。

B : ()

【断り 2】

(場面⑦) 夜、B君の部屋で。

A : 今度のテニス大会、ぼくのパートナーは誰になった。

B : ぼくとだよ。

A : えっ、君と。この前も君といっしょで、負けてしまったからなあ。

B : ()

【皮肉 2】

(場面⑧) 午後、大学の図書館で。

A : 君、フランス語をしっかりと勉強しているかい。

B : うん。毎日君から借りたあのテープで勉強しているよ。

A : おかしいなあ。君は一度フランスで暮した方が良いかもしれないね。

B : ()

II—3—③ 調査実験における対話文の可能な回答例

それでは、今回の調査実験で用いる対話文はどのような表現が適当な回答として当てはまるのであろうか。それぞれの回答として私が考えてみたものを挙げてみようと思う。また、不適当な表現とはどのようなものなのかも挙げてみることにした。

a 誘い (i)

(場面) お晝に、A君の家で

A : 今、何時かなあ。  제주대학교 중앙도서관

B : もうすぐ12時だよ。 JEJU NATIONAL UNIVERSITY LIBRARY

A : そうかあ。ねえ、お腹がすいていない。

B : ()

この會話はAがBに對して、お腹がすいているから何か食べようと誘いかけの婉曲表現をしているものである。先述したII—1の日本語の特徴・性質からみても、この表現は連想を基とするものと考えられるだろう。しかしAの「お腹がすいていない」という表現は、「12時だけれどもあなたはお腹がすいていませんか」という相手を思いやっているところもあると考えられるだろう。

この場面ではAの誘いの問いに對して、Bが連想を働かせてAの誘いにのるか、のらないのかによって返答は変わってくるであろうし、また誘いにのるか否かがはっきりとはわからない返答の方法もあるであろう。そのように考えていくと會話としての返答は三通りあるとみてよいだろう。

(1) Aの誘いにBがのった場合の例

A： そうかあ。ねえ、お腹がすいていない。

B： (そうだね。何か食べに行こうか。)

Bの「そうだね」という返答は同意を表しており、「食べに行こう」という表現からこれは明らかに同意の意図を伝えていると考えられるだろう。さらにまた

A： そうかあ。ねえ、お腹がすいていない。

B： (大学のそばにできた新しいレストラン、おいしいってよ。)

このようなBの返答も婉曲表現と考えられるだろう。Bは誰かから大学のそばにできた新しいレストランはおいしいと聞いて、自分も行って食べてみたい、これから行って見ないかという意図をAに同意しながら婉曲的に伝えていると考えられるだろう。

(2) Aの誘いにBがのらなかった場合の例

A： そうかあ。ねえ、お腹がすいていない。

B： (さっき食べたばかりなんだけど。)

(今日は胃の調子が悪くて、あまり食欲がないんだ。)

などの返答はいずれも断りの表現として考えられるだろう。

(3) 同意しているのか否か明確でない場合の例

A： そうかあ。ねえ、お腹がすいていない。

B：（今日、何時にごはん食べたの？）

このような返答は会話が継続していく中で、Aに對して同意しているのか否かが明確になってくるだろう。継続される会話はこのようなものが考えられるだろう。

A：（何も食べてないよ。）

B：（じゃ、お腹すいたよね。）

このように会話が進行する中で、Bの意志が明確にさせられてくるだろう。しかし今回の調査では、Aの意図に對して即座にBが明確に意志を返答しているものだけを適当なものとして、婉曲表現を理解しているものと考えていきたい。その理由は、(3)のように会話が継続しなければBの返答が適当か不適当かわからない場合には、継続される会話を推測しなければならないからである。この推測の範囲は広いものと考えられるだろうし、個人差も表出してくるだろう。それゆえに今回の調査では推測を必要とする返答ではなく、Aの問いに對して即座にBが明確に意志を返答しているものを適当としていこうと考え、(3)のような会話は不適当としていくことにする。

a 誘い (ii)

(場面) お晝に、大學の授業が終わった後で。

A：今夜、何か予定がある。

B：いや、特にないけど。

A：實は、君の好きなクラシック音樂のコンサートチケットが2枚あるんだけど。

B：（）

この会話はAがBに對して、コンサートに一緒に行かないかと誘いかけの婉

曲表現をしているものである。先述したII—1の日本語の特徴・性質からみても、この表現はAの文末が省略されていることからあいまいな表現とも考えられるだろうし、連想を基とするものとも考えられるだろう。また相手を思いやってあいまいな表現をしているとも考えられるだろう。

この場面ではAの誘いの問いに対して、Bが連想を働かせてAの誘いにのるのか、のらないのかによって返答は変わってくるであろうし、また誘いにのるのか否かがはっきりとはわからない返答の方法もあるであろう。そのように考えていくと会話としての返答は先述の(a誘い(i))のように三通りあるとみてよいだろう。

(1) Aの誘いにBがのった場合の例

A: 實は、君の好きなクラシック音楽のコンサートチケットが2枚あるんだ
けど。

B: (本当、行く、行く。)



このような表現は一目瞭然でAの誘いにBがのった返答と考えられるだろう。

(2) Aの誘いにBがのらなかった場合の例

A: 實は、君の好きなクラシック音楽のコンサートチケットが2枚あるんだ。

B: (行きたいけど、今日はアルバイトがあつて。)

このような返答はAの誘いにBがのらなかった時の返答と考えられるだろう。Bは「行きたいけど」と相手を思いやる表現をしながら、「今日はアルバイトがあつて」と文末を省略させて「行くことができない」という意志を婉曲的に表現して断っているのであると考えられるだろう。

(3) 同意しているのか否か明確でない場合の例

A: 實は、君の好きなクラシック音楽のコンサートチケットが2枚あるんだけど。

B: (そのコンサート、場所はどこ?)

このような返答はAの誘いにBがのったのか、のらなかったのかは會話が繼續していく中で判断されるものであると考えられる。Bの回答は明確ではなく、コンサート會場の場所によっては行きたくないとも考えることができるからである。先述したように會話の繼續が必要な場合には不適当な返答であると考えことにする。

b 依頼 (i)

(場面②) 夕方、大學からの歸り道。

A: 明日の講演會にどうもでも出席できないんだ。

B: じゃ、ぼく一人で行くことになるね。何か用事ができたの。

A: うん。でも、プログラムだけはほしいなあ。

B: ()

この會話は、講演會に出席できないAが出席するBにプログラムをもらってきてほしいという依頼の婉曲表現である。先述のII—1 日本語の特徴・性質からみると、この表現も連想を基とするものと考えられるだろう。

この場面ではAの依頼の婉曲表現に對して、Bが連想を働かせてその依頼を受けるのか、断るのかという返答が考えられるだろうし、またBの意志が明確でない返答も考えられるであろう。

(1) Aの依頼をBが受ける場合の例

A： うん。でも、プログラムだけはほしいなあ。

B： (じゃ、もらってきてあげるよ。)

この返答は明らかに依頼を受けたことがわかるだろう。

(2) Aの依頼をBが断る場合の例

A： うん。でも、プログラムだけはほしいなあ。

B： (もらえたら、もらってくるけど。期待しないで。)

このような返答はあいまいで何を言いたいのか理解しづらいものかもしれないが、「期待しないで」という表現が断りだと考えられるだろう。出席できないがプログラムだけはほしいという相手を思いやって、あいまいな表現をしていると考えられるだろう。



(3) Bの意志が明確ではない場合の例

A： うん。でも、プログラムだけはほしいなあ。

B： (どうしてプログラムが必要なの。)

このような返答の場合には会話が継続していかなければ、Bの意志は明確にはわからないだろう。先述したように会話の継続が必要な場合には不適當な返答であると考えことにする。

b 依頼 (ii)

(場面) 朝、講義が始まる前の教室で。

A： 文學史のレポートをそろそろ書かないといけないね。

B : 今週の金曜日までだよ。

A : 君、何か役に立ちそうな本を持っていない。

B : ()

この會話は、まだレポートを書いていないAが、Bにレポートを書くために何か役に立つ本を貸してほしいという依頼の婉曲表現である。先述のII-1 日本語の特徴・性質からみてみると、この表現も連想を基とするものと考えられるだろう。

この場面ではAの依頼の婉曲表現に対して、Bが連想を働かせてその依頼を受けるのか、断るのかという返答が考えられるだろうし、またBの意志が明確でない返答も考えられるであろう。

(1) Aの依頼をBが受ける場合の例

A : 君、何か役に立ちそうな本を持っていない。

B : (うん、持っているよ。必要なら貸そうか。)

このような返答ではBの「うん」というあいづちが、Aの依頼を理解し、受け止めていることがわかるであろう。

(2) Aの依頼をBが断る場合の例

A : 君、何か役に立ちそうな本を持っていない。

B : (あいにく僕も持ってないなあ。)

このような返答ではBの「あいにく」という前置きが断りを示すものとなり、さらに續けて「持ってない」という表現が断りを確定的にしているものと考えられるだ

ろう。

(3) Bの意志が明確ではない場合の例

A：君、何か役に立ちそうな本を持っていない。

B：（えっ、まだ書いてないの。）

このような返答の場合には会話が継続していかなければ、Bの意志は明確にはわからないだろう。先述したように会話の継続が必要な場合には不適当な返答であると考えことにする。

c 断り (i)

(場面) 夜、電話で。

A：用件は何だい。

B：明日、引っ越しなんだけど、手伝ってほしいんだ。

A：そうしたいけど、今、腰が痛くてねえ。

B：（ ）

この会話はBの依頼に対してAが断るという婉曲表現である。断りの婉曲表現はII-1日本語の特徴・性質からみても、連想を必要とし、さらに相手を思いやって發せられる場合が多いようである。

この場面ではAの断りに対してBが承諾するという返答が適当であると考えられるだろうし、Aの断りに対してBが再度依頼するという会話も考えられるだろう。またBの意志が明確ではない場合も考えられるだろう。

(1) Aの断りに対してBが承諾する場合の例

A： そうしたいけど、今、腰が痛くてねえ。

B： (本当。じゃ、お大事にね。)

このような返答は明らかに、Aの断りに対してBが承諾しているものであると考えられるだろう。

(2) Aの断りに対してBが再度依頼する場合の例

A： そうしたいけど、今、腰が痛くてねえ。

B： (ほんの少しでも手伝うことは無理かな。)

このように一度断りをうけながらも、再度依頼するという場面は、親しい間柄やビジネスでのやり取りの時には多く使われるであろうが、通常ならば一度断りをうけた場合には(1)の会話のように相手の断りをそのまま受け入れることが多いであろう。

(3) Bの意志が明確ではない場合の例

A： そうしたいけど、今、腰が痛くてねえ。

B： (いつから腰が痛い。)

このような返答は会話の継続の中で、Bが承諾するのか、さらにもう一度依頼をするのが明確になってくるだろう。それゆえ先述のように不適當な返答である考えることにする。

c 断り (ii)

(場面) 夜、B君の部屋で。

A： 今度のテニス大会、ぼくのパートナーは誰になった。

B： ぼくとだよ。

A： えっ、君と。この前も君といっしょで、負けてしまったからなあ。

B： ()

この会話はBの發話に対してAが断るという婉曲表現で、断りの婉曲表現はII-1 日本語の特徴・性質からみると、連想を必要とし、やはり相手を思いやって發せられる場合が多いようである。この会話もAが「Bとのペアはいやだ」と直接的に表現するのではなく「君と一緒に負けてしまったからなあ」という婉曲的な表現を使って「今回も君と一緒にだったら試合で勝つことはできないだろうから、他の人とペアを組むことができればいいんだけど」という意図を伝えていると考えられるだろう。またこのAの發話には皮肉的な部分があるとも考えられるし、Bの「ぼくとだよ」という表現も音聲によってはBもAとのペアはいやだという意図がうかがえるだろう。この對話文は日本語母語話者ならともかく、日本語学習者にとっては少々理解が困難かもしれないと思われる。

しかし、この場面ではAの断りに対してBが承諾するという返答が適当であると考えられるだろうし、Aの断りに対してBが再度依頼するという会話も考えられるだろう。またBの意志が明確ではない場合も考えられるだろう。

(1) Aの断りに対してBが承諾する場合の例

A： えっ、君と。この前も君といっしょで、負けてしまったからなあ。

B： (そうだね。今からペアを組み替えられるかなあ。)

このような返答は明らかに、Aの断りをBが理解し承諾して、新しく提案をしているものであると考えられるだろう。

(2) Aの断りに対してBが再度依頼する場合の例

A： えっ、君と。この前も君といっしょで、負けてしまったからなあ。

B： (そんなこと言わずに、もう一度やってみようよ。)

Bの「もう一度やってみようよ」という表現が再度依頼している意図がうかがえるだろう。

(3) Bの意志が明確ではない場合の例

A： えっ、君と。この前も君といっしょで、負けてしまったからなあ。

B： (なんでそんなこというの。)

このような返答は会話の継続の中で、Bが承諾するのか、さらにもう一度依頼をするのが明確になってくるだろう。それゆえ先述のように不適當な返答である考えることにする。

d 皮肉 (i)

(場面) お晝に、大學の食堂で。

A： 昨日頼んだ本を持って来てくれたかい。

B： ごめん、家に置いてきたよ。

A： またかい。君は本当に物覚えがいいねえ。

B： ()

この会話はBの行動に対してAが皮肉を言うという場面である。この皮肉というものを理解するには、連想なくしてはできないだろう。II—1 日本語の特徴・性質からみても、皮肉の表現は連想を最も必要とする表現であると考

えられるだろう。直接的な表現を避けて、例えや本来の意味とは全く逆の話をすることで相手の連想をさそって會話を進めていくのであるが、日本語母語話者同士の會話でも皮肉が通じる時とそうでない時があるのである。

それゆえにこの場面では皮肉が通じた返答とそうでない返答が考えられるだろう。

(1) 皮肉が通じた場合の例

A：またかい。君は本当に物覚えがいいねえ。

B：（ごめん、ごめん。明日は必ず持ってくるよ。）

このような會話はAの皮肉の意味（頼んだ本をまた忘れるなんて、なんて物覚えが悪いのか）に対して、Bは素直に受け止めて誤っている例であるので、皮肉が通じたと考えていいだろう。またこのような返答も考えられるだろう。

A：またかい。君は本当に物覚えがいいねえ。

B：（うん、僕は物覚えはすごくいいんだけどね。）

これは皮肉に対して皮肉で答えるという例であると言えるだろう。Bは自分が本を忘れたことを棚に上げて、Aの皮肉の意味に対して皮肉で答えているということであろう。

(2) 皮肉が通じない場合の例

A：またかい。君は本当に物覚えがいいねえ。

B：（えっ、どうしてそんなことをいうの。）

このような返答は皮肉が通じていないと考えられるだろう。しかし、この表現はイントネーションによって皮肉が通じたものか否かが違ってくると考えられるだろう。Aの表現の対してBが普通のイントネーションで答えているのならば、これは皮肉が通じていないと考えられるだろうし、Bのイントネーションに抑揚があり強調しているような感じであれば、Aの皮肉の意味を理解して反発するような返答であると考えられるだろう。しかし今回の実験調査では筆記のみの解答を要求し音聲は関係のないものとしているので、このような表現も不適当な返答であると考えられることにする。

d 皮肉 (ii)

(場面) 午後、大学の図書館で。

A : 君、フランス語をしっかりと勉強しているかい。

B : うん。毎日君から借りたあのテーブルで勉強しているよ。

A : おかしいなあ。君は一度フランスで暮した方が良くもしいね。

B : ()

この会話も皮肉の婉曲表現である。皮肉表現は連想なくしては、会話が進展していかないことはすでに述べた。それゆえにこの場面では皮肉が通じた返答とそうでない返答が考えられるだろう。

(1) 皮肉が通じた場合の例

A : おかしいなあ。君は一度フランスで暮した方が良くもしいね。

B : (そんなに僕は勉強不足かな。)

このような会話はAの皮肉の意味(ここで勉強するよりも、一度フランスで暮した方が早く上達するのではないか)に対して、Bは素直に受け止めている例

であるので、皮肉が通じたと考えていいだろう。またこのような返答も考えられるだろう。

A：おかしいなあ。君は一度フランスで暮した方が良いかもしれないね。

B：（すばらしいアドバイスをありがとう。）

これは皮肉に対して皮肉で答えるという例であると言えるだろう。Aの皮肉の意味に対して「すばらしいアドバイス」と皮肉っているものと捉えられるだろうから、皮肉表現が理解されたと考えられるだろう。

(2) 皮肉が通じない場合の例

A：おかしいなあ。君は一度フランスで暮した方が良いかもしれないね。

B：（フランスに行かば、주말에 프랑스어가上手になるよね。）

このような返答は皮肉が通じていないと考えられるだろう。Aの表現をそのまま受け止めていて、その背後の意図まで考慮していないと考えられるだろう。しかし（d-i皮肉）で述べたように音聲によってもその捉え方には異なりがあるのである。

II-4 結果と考察

調査用紙に記述された回答と、それぞれの回答に対する理由に基づいて、婉曲表現を理解していると判断された場合には1点を、理解していないと判断された場合には0点を与えた（満点は8点）。また日本での滞在経験、日本語の学習期間は以下のようにした。結果の得点化は実験者が行なった。

- 日本での滞在経験 0→滞在経験なし
 I→1～5ヶ月の滞在経験あり
 II→6～11ヶ月の滞在経験あり
 III→1年以上の滞在経験あり
- 日本語の学習期間 a 4年以上
 b 3年以上4年未満
 c 2年以上3年未満
 d 2年未満

II-4-① 四年生の結果と考察

No.	滞在経験 学習期間		場面①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	得点
	ア	III	a	1	1	1	1	1	1	1	1
イ	0	a	0	1	0	1	1	1	1	0	5
ウ	I	b	1	1	1	1	1	1	1	1	8
エ	III	a	1	1	1	1	1	1	1	1	8
オ	III	c	1	1	1	1	1	1	1	1	8
カ	0	b	1	1	1	1	1	1	1	0	7
キ	III	a	1	1	1	1	1	1	1	1	8
ク	0	b	1	0	0	1	1	1	0	1	5
ケ	III	b	1	1	1	1	1	1	1	1	8
合計点			8	8	7	9	9	9	7	8	65 7.22
正答率			89%	89%	78%	100%	100%	100%	78%	89%	

四年生の平均得点 7.22点

(No. ア、イは男子、No. ウ～ケは女子 合計9人で計算)

場面①～⑧の正答率が78～100%ということは割合に平均的に理解しているといっていいただろう。また場面③⑦⑧の正答率が78%ということは、断りと皮肉の理解度が少し低いとみられる。さらにNo.イとクは5点と他の学生と点数の差が見

られるが、この二人は日本語学科の学生ではなく、専門的に日本語を学習しているわけではないことが調査実験後にわかった。この二人を除いて平均得点をだしてみると7.88点となり、二、三年生の平均点を上回り、二年生の平均点とは1.4点もの差が出てきている。四年生の平均得点が一番高いということは、調査実験以前の私の予想どおりであるといえよう。つまり四年生は学習期間も長く、1年以上の日本での滞在経験もある学生が多いことから、婉曲表現の理解度も高いと考えてよいと言えるだろう。

そして、場面①と⑤は同じ依頼の婉曲表現であるわけだが、正答率に差があるのはどういうことであろうか。これは場面②と⑥、④と⑧にもいえることである。すなわち、これは100%の正答率という結果は婉曲表現が理解されやすいものであるということであり、さらに正答率が低くなるに従って婉曲表現は理解されにくいものであるということであろう。

II-4-② 三年生の結果と考察



학교 중앙도서관
JEJU NATIONAL UNIVERSITY LIBRARY

	滞在経験 学習期間	場面①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	得点
No. コ	I a	1	1	1	1	1	1	1	0	7
サ	O c	1	1	1	1	1	1	1	0	7
シ	解答	無し								
ス	"	"								
セ	"	"								
ソ	II a	1	1	1	1	1	1	1	1	8
タ	O c	1	0	1	1	1	1	1	0	6
チ	III a	1	1	1	1	1	1	1	0	7
ツ	III a	1	1	1	1	1	1	1	0	7
合計点		6	5	6	6	6	6	6	1	42 7
正答率		100%	83%	100%	100%	100%	100%	100%	17%	

三年生の平均得点 7点

(Na, シ、ス、セの学生は除外し、Naコーツは全員女子)

場面①～⑧の正答率 場面①③④⑤⑥⑦→100%

場面②→83% 場面⑧→17%

場面①③④⑤⑥⑦に比べて、場面②は少し理解度が低くなっているが6人の学生のうち一人だけが0点ということから、正答率が下がるのは仕方がないことであり、ここで場面②の理解も少々困難だとは言い切れないだろう。しかし場面⑧の正答率は著しく低いことから、皮肉の理解が困難であるとみられる。これはII-3-③皮肉のところですでに述べたように、場面⑧の理解はかなり困難であったと思われる。Naチ、ツのように日本での滞在経験もあり、学習期間の長い学生でも0点ということからも、この皮肉の理解は少々困難であると考えられるであろうが、しかし同じ皮肉の表現でも場面④は正答率が100%であり、場面⑧は17%という大差はどのようにして生じてしまったのであろうか。場面⑧の回答用紙をみてみるとAの發話を御誘としてとらえている学生が多かった。ここに正答率が下がってしまった理由があると思われるのである。

またNa, シ、ス、セの学生を除外した理由は、勿論回答がなかったということもあげられるが、この三人の学生は日本語学科の学生ではないことが調査実験後にわかったからでもある。

そして四年生の結果と同じように、日本での滞在経験も1年以上あり、学習期間も長い学生は7点、8点という得点をだしている。婉曲表現の理解には、やはり日本での滞在経験や学習期間が影響していると考えてもいいのではないだろうか。

II-4-③ 二年生の結果と考察

(i) 男子学生

No.	滞在経験 学習期間	場面①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	得点
		テ	Ⅲ a	1	1	1	1	1	1	
ト	Ⅲ c	1	0	1	1	1	1	1	0	6
ナ	0 c	0	1	1	1	1	1	0	0	5
ニ	0 d	1	0	1	1	1	1	1	0	6
ヌ	Ⅲ b	1	0	1	1	1	1	1	1	7
ネ	0 d	1	0	0	1	1	1	1	1	6
ノ	Ⅱ d	1	1	1	1	1	1	1	1	8
合計点		6	3	6	7	7	7	6	4	46 6.57
正答率		86%	42%	86%	100%	100%	100%	86%	57%	

二年生男子の平均得点 6.57点

場面①～⑧の正答率 42%、57%、86%、100%とばらつきが見られる。場面②と⑧の正答率が低いことから、依頼と皮肉の理解が困難かと思われる。皮肉の理解が困難だと思われる理由はすでに上述したが、場面②の依頼はなぜ理解が困難なのであろうか。場面⑥の依頼表現では100%の正答率であるのに場面②はなぜ理解度が低いのであろうか。私が考えるには場面⑥の依頼表現より場面②のほうが、婉曲表現としての濃度が高いのではないだろうかということである。すなわち場面②の表現は婉曲度が大きいのではないかということである。

またNo. テ、ヌは日本での滞在期間も一年以上で学習期間も長い。得点をみると、No. テは8点の満点でNo. ヌは7点ということから、やはり日本での滞在期間や学習期間が婉曲表現の理解に影響していると思われるのである。

けれどもNo. ノのように滞在期間がⅡで学習期間がdでも8点という得点を得ている。これはどういうことであろうか。私の推測では、滞在期間の影響も考えられるがNo. ノ自身がかなり一生懸命に日本語の学習をしているのではない

だろうかということである。調査実験の前に行なった予備調査のアンケート用紙をみると、Na ノの場合、日本のドラマや音楽を通じて学習しているらしい。ドラマを見るということは、母語話者の談話を直接に目で見、耳で聞くということであるから、日本語学習者にとっては効果的な学習方法といえるのではないだろうかと思われるのである。それゆえに日本での滞在経験や学習期間の有無も、婉曲表現の理解に影響してくるものであろうが、Na ノのような学習方法の影響も婉曲表現の理解に関係してくるといってもいいだろう。

(ii) 女子学生

	滞在経験 学習期間	場面①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	得点
Na. ハ	0 a	1	1	1	1	1	1	1	1	8
ヒ	III a	1	1	1	1	1	1	1	0	7
フ	0 b	1	1	1	0	1	1	1	1	7
ヘ	0 a	1	0	1	1	1	1	1	0	6
ホ	III c	1	1	1	1	1	1	0	1	7
マ	0 a	1	0	1	1	1	0	1	1	6
ミ	0 a	1	0	1	1	1	0	1	1	6
ム	0 a	1	1	1	1	1	1	1	0	7
メ	0 d	1	1	1	1	1	0	1	0	5
モ	0 a	1	1	0	1	0	1	1	1	6
ヤ	0 a	1	0	1	1	1	1	1	0	6
ユ	0 d	1	0	0	1	1	1	1	0	5
ヨ	0 d	1	0	1	1	1	1	1	0	6
ラ	0 a	1	0	1	1	1	1	1	1	7
リ	0 d	1	0	1	1	1	1	1	1	7
ル	0 d	1	1	0	1	1	1	0	1	6
レ	0 d	1	0	1	1	1	1	1	1	7
ロ	0 a	0	0	1	1	1	1	0	0	4
合計点		17	8	15	17	17	15	15	10	114 6.33
正答率		94%	44%	83%	94%	94%	83%	83%	56%	

二年生女子の平均得点 6.33点

場面①～⑧の正答率 44%、56%、83%、94%とかなりのばらつきが見られる。

場面②と⑧の正答率が低いことから、やはり依頼と皮肉の理解が困難かと思われる。また得点のばらつきもかなりみられる。そして日本での滞在経験がほとんどないということが大きな特徴としてあげられるだろう。しかし学習期間の長い者が多い。けれども得点が高いというわけでもない。これはどういうことであろうか、私なりに考えてみた。高校生の時からもうすでに学習を始めている学生が多いというわけであるが、高校から学習したといっても、そこで学習することは文字の学習から簡単な基礎文法だけである。日本語学院などへ通って自主的に学習していた者は別として考えれば、高校生の時点から学習を始めたとしても、それは本格的な会話の学習とはいえないのである。それゆえに例え学習期間が長いとしても、婉曲表現の理解にまで及ぶ学習能力があるとはいえないのではないだろうか。これは二年生の回答用紙をみれば、そのことが実証されるであろう。二年生の回答用紙は三、四年生のそれと比べると、文法的な間違いがかなり多くみられた。また三、四年生は回答する際に日本語を使って記述していたが、二年生の場合には韓国語で記述する学生もいたということである。これらは二年生の学習能力の未熟さが表われているかと思われるのである。

また二年生全体の得点をもてみると

二年生全体 合計得点 160 平均点 6.4点

という結果を得た。二年生の平均得点は他の学年より低い。やはり、これも日本での滞在経験やいかに本格的に日本語の学習を始めたかということと関連があるのではないだろうかと思われる。

そして今回の調査実験は、被験者の回答を筆記のみで行なった。日本語の場合、他の言語に比べて書き言葉と話し言葉の形態上の相違がある。また

書き言葉では、文の抑揚やリズム、音の強弱などがほとんど得られない。被験者に対話文をテープで聞かせて記述を求めたが、被験者の回答もテープに録音するという形で調査実験を行なったのなら、また違った結果がでてきたかもしれないだろうと思われる。

II-4-④ 男女別の結果と考察

二年生から四年生全体の男女別の得点と平均点も算出してみた。私の予想としては一般的な考えと同じように女子学生のほうが得点が高いかと思ったのだが、男女の人数の比率が激しいためか、このような結果となった。

	人数	総合得点	平均点
全男子学生	9人	59点	6.56点
全女子学生	34人	208点	6.12点

今回の結果からは男子学生のほうが高い得点を出しており、婉曲表現の理解度は女子学生よりも男子学生のほうが高いと見受けられる。一般的に第二言語学習者の数は男性よりも女性のほうが多いといえよう。今回の調査実験でも、女子学生の数は男子学生の約4倍もある。しかし実際の結果は、男子学生のほうが婉曲表現の理解度が高かったわけで、人数と婉曲表現の理解度は関係がないといってもいいだろう。

II-4-⑤ 調査実験での学生の回答

ここで実際に学生たちの0点の回答とはどのようなものだったのかを記してみようと思う。ここに記載した学生の回答は、彼等が記述したとうりに記載した。ただし読みやすさの便宜をはかるために、私が句讀点を付け足して記載したのものもある。

結果の得点化は実験者（私）が行なったのであるが、II—3—③調査実験における対話文の可能な回答例を参考にし、また文脈に添わないような回答も0点とした。

a 誘い (i)

(場面) お晝に、A君の家で

A：今、何時かなあ。

B：もうすぐ12時だよ。

A：そうかあ。ねえ、お腹がすいていない。

B：(そうか。そうだな。)

このような回答は會話としては成立するものであるが、しかし會話が繼續していかなければ、BがAの誘いにのったのか否かが明確に判断できないので0点とした。さらに下記のような回答は文脈に添わないものとして0点とした。

B：(私もお腹がすいていない。)\ いいえ、私はおなかですいている。 \

無回答1人)

JEJU NATIONAL UNIVERSITY LIBRARY

a 誘い (ii)

(場面) お晝に、大學の授業が終わった後で。

A：今夜、何か予定がある。

B：いや、特にないけど。

A：實は、君の好きなクラシック音樂のコンサートチケットが2枚あるんだけど。

B：(クラシックはちょっと…)

Aが「君の好きなクラシック音樂」と言っているのにも関わらず、このような回答がでてきたということは文脈に添わないものとして0点とした。

b 依頼 (i)

(場面②) 夕方、大学からの帰り道。

A: 明日の講演會にどうしても出席できないんだ。

B: じゃ、ぼく一人で行くことになるね。何か用事ができたの。

A: うん。でも、プログラムだけはほしいなあ。

B: (そうですか。ざんねんですね。)

このような回答は會話が繼續していかなければ、BがAの依頼に對して承諾するのか否かが明確に判断できないので0点とした。またこれらは文脈に添わないものとして0点とした。

B (そうか。じゃんねんだね。たぶんまだあるから、こんとにしたらいいね。

\そうなら、ぼくがつたえるわ。 \そうですか。じゃここ、あんないの本を見なさい。 \ざんねんだね。がんばって。 \そうね。だったら用事の

時間を。 \無回答(6人) 학교 중앙도서관



JEJU NATIONAL UNIVERSITY LIBRARY

さらにこのような回答も0点とした。

B: (困るね。 \講演會について話してあげよう。 \うん。。。やっぱりできるだけ行くほうがいいと思う。)

これらの回答は一見會話が成立していると考えられるが、「A君はどのような意図で發話したと思いますか。」の問いの回答をみると、Aの意図すなわち婉曲表現を読み取れず文面上だけをとらえて回答していた。それゆえに婉曲表現を理解しての回答ではないものとして0点とした。

b 依頼 (ii)

(場面) 朝、講義が始まる前の教室で。

A: 文學史のレポートをそろそろ書かないといけないね。

B：今週の金曜日までだよ。

A：君、何か役に立ちそうな本を持っていない。

B：(たいへんですね。どうやるの。＼まだしない?＼え…持ちました。どうしてる?)

このような回答も会話が継続していかなければ、BがAの依頼に対して承諾するの否かが明確に判断できないし、また文脈に添わないものとして0点にした。

c 断り (i)

(場面) 夜、電話で。

A：用件は何だい。

B：明日、引っ越しなんだけど、手伝ってほしいんだ。

A：そうしたいけど、今、腰が痛くてねえ。

B：(そうですか。＼だいじょうぶだよ。＼ごんねんだね。＼無回答3人)

このような回答も会話が継続していかなければ、BがAの断りに対して承諾するの否かが明確に判断できないし、また文脈に添わないものとして0点にした。

c 断り (ii)

(場面) 夜、B君の部屋で。

A：今度のテニス大会、ぼくのパートナーは誰になった。

B：ぼくとだよ。

A：えっ、君と。この前も君といっしょで、負けてしまったからなあ。

B：(そうかもね。＼はい。＼その時は体のじょうたいがよいので。
＼無回答2人)

このような回答も會話が繼續していかなければ、BがAの斷りに對して承諾するの否かが明確に判斷できないし、また文脈に添わないものとして0点にした。

さらにこのような回答も0点とした。

B：（今度は違うよ。ぼく一生懸命に練習したんだからまかしておけ。）

この回答は一見會話が成立していると考えられるが、「A君はどのような意図で發話したと思いますか。」の問いの回答をみると、Aの意図すなわち婉曲表現を読み取れず文面上だけをとらえて回答していた。それゆえに婉曲表現を理解しての回答ではないものとして0点とした。

d 皮肉 (i)

(場面) お晝に、大學の食堂で。

A：昨日頼んだ本を持って来てくれたかい。

B：ごめん、家に置いてきたよ。

A：またかい。君は本当に物覚えがいいねえ。

B：（またわすれたかな。）

このような回答は文脈に添わないものとして0点とした。

d 皮肉 (ii)

(場面) 午後、大學の図書館で。

A：君、フランス語をしっかりと勉強しているかい。

B：うん。毎日君から借りたあのテーブルで勉強しているよ。

A：おかしいなあ。君は一度フランスで暮した方が良いかもしれないね。

B：（そうかな。一度考えてみるよ。＼私もそうだと思うんだ。＼そうか、私もそうに思いだ。＼でも、つこうがよくないので、どうしてもしかたが

ないよ。＼しかし、きかいがないからね。＼そう私も勉強しているが。
＼でも、あなたのテープがいいと思います。＼實はフランス語の勉強
しないよ。＼うん。ぼくもそうしたいね。お金をためてフランスへ行きた
い。＼そうかな～。でも今はこんなに勉強したい。＼そうか。そして
ね。まだ留學は考えたことがないから。＼そうね。私も一度行って
みたい。＼ちゃんと勉強しているのに…私のフランス語のようすがおか
しいの。＼今度、眞劍に考えて留學するかもね。＼無回答3人)

これらの回答は一見會話が成立していると考えられるが、「A君はどのような
意図で發話したと思いますか。」の問いの回答をみると、Aの意図すなわち婉
曲表現を読み取れず文面上だけをとらえて皮肉であると理解できずに回答して
いた。それゆえに婉曲表現を理解しての回答ではないものとして0点とした。



III. 結 論

以上、調査実験を通じて婉曲表現の理解について調べてみた。

今回の調査実験は、日本語を第二言語として学習している韓国人学習者たちが、日本語の婉曲表現をどの程度理解できるか、またその理解に影響を及ぼす要因は何であるかを明らかにすることを目的とした。

その結果、四年生は婉曲表現の理解度が高く、二年生は低いということが明らかになった。また理解に影響する要因としては、二つ考えられ、その一つは日本での滞在経験であると考えられるだろう。これは滞在期間が長い者は理解度が高い傾向にあるが、たとえば滞在期間6ヶ月でもアルバイトなどしている者も理解度が高い傾向にある。これはやはり日本での生活を通して会話力を身につけているものと考えられるだろう。またもう一つの要因は学習期間が考えられるだろう。これもまた期間が長い者は理解度も高い傾向にあるが、学習期間がいくら長くてもその学習内容の濃度によって理解度に差異が出てくると言えるであろう。さらに滞在経験がなく学習期間が短くても、日本のドラマや映画等を見るという学習方法から会話能力を身につけている者もいるということにも注目すべきだろうと思われる。

そして全体的に皮肉表現の理解度が低かった。先述したように、皮肉表現には常に連想が伴うもので婉曲度の大きいものであり、日本語母語話者同士でも理解できない時があり、また他の表現よりも実際の会話の中では、皮肉表現の使用頻度が低いのではないかと考えられるだろう。そのような表現が日本語学習者にとって理解が困難なものであるということは仕方がないことであろう。このような表現までも身につけるには、日本語母語話者の民族性や文化等の理解なくしては困難だとも言えるだろうし、コミュニケーションとしての談話学習の必要性もあるのではないかと、II-2-④で先述したように語用論的指導も必要ではないかということである。今回の調査実験の結果からみてもわかるよう

に、得点の高い学生は日本での滞在期間が長かったり、学習期間も長く学院等で母語話者教師の授業を受けたりして、実際に談話に触れているのである。しかし私自身が考えるには、いくら日本での滞在期間が長くても日本語が上達しない場合もあり得るのではないだろうかということである。現在、日本に住んでいる韓国人の数は多い。それゆえにアルバイトをしても在日韓国人の店で働いていて日本語を使わずにいたり、また寮ではルームメイトと韓国語で話したりしている者も実際には多数いるからである。このような点から考察してみると、学習期間とその学習内容が問題となってくるのではないだろうか。そしてその学習内容とは、やはり談話学習の必要性ということではないだろうか。

すなわち談話学習といっても、今回のような婉曲表現を含んだ対話や會話を経験させることが必要なのではないだろうかということである。先述したように日本語の特徴・性質には、あいまいさ、連想を基とする、相手を思いやるというものがあるだろうと私は考える。こういった特徴・性質は今回の調査実験で使用した対話、すなわち誘い・依頼・断り・皮肉といったものに如實に表われてきているのであろうと私は考える。ということは、基礎的な文法や語彙を習得した後には、このような婉曲表現を含んだ対話や會話をロールプレイ等において実際に経験していく必要があるのではないだろうか。

そしてまた談話学習だけにとどめるのではなく、さらには日本文化や民族性の理解も必要ではないだろうかと私は思う。言語はその國の民族性や社會に密接しており、その母國語ゆえにその言語習慣の違いがあることは当たり前である。日本語母語話者は婉曲表現を使う習慣があるが、日本語学習者にとってはそれは学習しなければ習得できないものなのである。自分も持っている母國語の言語習慣で第二言語を操れるかといえば、それはどうであろうか。第二言語の学習をすすめていくには、その國の文化・民族性さらには歴史などをバックボーンとしてその國のことばを理解していくことも必要なのではないだろうか。

日本語の特徴・性質で述べた、日本語のあいまいさ、連想を基とする、相手を思いやるということは、本当に日本語らしさであるだろうと私も思う。この日

本語らしい日本語を習得していくには、婉曲表現の理解と談話の学習や経験が必要であるのと同時に、日本文化や民族性の理解も必要なのではないかと考えられるであろう。



제주대학교 중앙도서관
JEJU NATIONAL UNIVERSITY LIBRARY

参 考 文 献

〈論文〉

- 生駒知子・志村明彦, 「英語から日本語へのプラグマティック・トランスファー: 『断り』という發話行爲について」 『日本語教育』, 1992.
- 李善雅, 「議論の場における言語行動-日本語母語話者と韓國人學習者の相違-」 『日本語教育』, 2001.
- 岡本眞一郎, 「言語表現の状況的使い分けに関する社會心理學的研究」 『風間書房』, 2000.
- _____, 「皮肉かお世辭か—誇張が認知に及ぼす役割—」 『愛知學院大學文學部紀要』30号, 2000.
- 甲斐朋子・田渕咲子, 「日本語の感情を含む發話に對する韓國人學習者の聞き取りと發話をめぐって」 『日本語教育』, 2002.
- カノックワン・ラオハプラナキット, 「日本語における『断り』-日本語教科書と實際の會話との比較-」 『日本語教育』, 1995.
- 柏崎秀子, 「話しかけ行動の談話分析-依頼・要求表現の實際を中心に-」 『日本語教育』, 1993.
- 辻大介, 「アイロニーのコミュニケーション論」 『東京大學社會情報研究所紀要』55号, 1997.
- 植田和美, 「日本人學生と韓國人留學生における依頼の談話ストラテジー分析-依頼の難易及び上下・親疎關係を規定因として」 『日本語教育』, 2002.
- 秦秀美, 「日・韓における感謝の言語表現ストラテジーの一考察」 『日本語教育』, 2000.
- ボリーザトラウスキー, 「日本語の談話の構造分析-勧誘のストラテジーの考察-」 『くろしお出版』, 1993.
- 松見法男・森敏昭, 「外國人留學生における日本語婉曲表現の理解」 『廣島大學教育學部紀要』, 1995.

〈單行本〉

- 岡本眞一郎, 『ことばの社會心理學』, ナカニシヤ出版, 2000.
海保博之・柏崎秀子編, 『日本語教育のための心理學』, 新曜社, 2002.
加賀野井秀一, 『日本語の復権』, 講談社現代新書, 1999.
金田一春彦, 『日本語の特質』, 日本放送出版き協會, 1991.
_____, 『日本人の言語表現』, 講談社現代新書, 1975.
金田一春彦編, 『日本語の姿』, 大修館書店.
グリーン, J., 『言語理解(認知心理學講座4)』, 海文堂出版, 1989.
小泉保, 『入門 語用論研究—理論と応用—』, 研究社, 2001.
橋元良明編, 『コミュニケーション學への招待』, 大修館書店, 1997.
水谷修, 『話しことばと日本人—日本語の生態—』, 創拓社, 1979.

〈辭典〉

- 金田一春彦編, 『學研 國語大辭典 第二版』, 學習研究社, 1989.
小學館 國語辭典編集部編, 『日本 國語大辭典 大二版』, 小學館, 2000.
芳賀綏・佐々木瑞枝・門倉正美, 『あいまい語辭典』, 東京堂出版, 1996.
新村 出編, 『廣辭苑』, 第五版, 岩波書店, 1998.

〈例文出典〉

- 司馬遼太郎, 『耽羅紀行』, 朝日文庫, 1990.
林眞理子, 『ルンルンを買っておうちに歸ろう』, 角川文庫, 1985.
柳美里, 『生』, 小學館, 2001.

〈インターネット〉

- 教えて!goo (<http://oshietel.goo.ne.jp/kotaeru.php3?qid=866015>)
ふ き 出 し の レ ト リ ッ ク (http://www.geocities.jp/balloon_rhetoric/example/euphemism.html)

<Abstract>

**- An analysis of understanding the euphemistical expressions
in Japanese for the Koreans who learn Japanese -**

Chiyoko Aoyama

Graduate School of Japanese Language and Literature
Cheju National University

Supervised by Professor Lee Chang-ik

The theme of this paper, which is about "the understanding of euphemistical expressions in Japanese", has been a problem that I had concerned before entering the graduate school. While teaching Japanese as a lecturer, I have wondered how I could teach the language that is identical with the one of Japanese natives. In my daily life as well, I have wondered how I could speak Korean that is identical with Korean people. When speaking Korean as a native tongue of Japanese, I speak Korean in Japanese manner. That sometimes ends to misunderstandings and interruptions of communications. The cause is the euphemistical (ambiguous, indirect or roundabout) expressions that are commonly used in the communications in Japan.

Vice versa, can a foreigner who learns Japanese master these expressions which are commonly used in daily Japanese conversations? Can these roundabout expressions be hardly understood? That could be explained by the difference between the cultures of countries but the real communications can be established by acquiring the expressions. The most interesting part of learning a second language would be the completion of listening, speaking and writing as well as sufficiently understand it.

Therefore, in this study, I surveyed the characters of Japanese

euphemistical expressions, which manifest as indirect, ambiguous or roundabout manners, and the expressions that are based on the associations of ideas or considering others. I next studied what kind of guidance would be essential for teaching Japanese in the future focused on the necessity of the conversational practice. There, I described the necessity of the conversational practice, the actual phonation and practical phonations based on the structure of the conversation.

I further studied the degree of understanding the expressions by surveying the students who learn Japanese. The survey was performed targeting 49 students between second and fourth graders of Cheju National University who learn Japanese as the second language. The purpose of the study is first to clarify how much Koreans can understand the Japanese euphemistical expressions and secondly to deduce what are the primary factors to affect the understanding of the expressions. I also summarized the outcome in each grades by describing the sample of possible answers in the survey, and calculating the result based on the outcome. The outcome includes the comparison between the genders and the answers of the students!

The result showed that the fourth graders understood the expressions significantly well comparing to the second graders. It was revealed that the primary factors that affect the understandings were the stay-in-Japan experience and the learning period. It should be noted that some could obtain the sufficient conversational skills through watching Japanese dramas or movies in spite of no experience of staying Japan or short learning period.

As a whole, the level of understanding the sarcastic expressions in Japanese was low. The sarcastic expressions always accompany the association of ideas that even native Japanese cannot understand the true meaning because they are expressed far euphemistically. But the expressions are rarely used in daily communications and would be difficult to learn for the foreigners. One should understand the racial traits and cultures of Japan and study the conversational skills in order to obtain the expressions. It may be necessary that the learners should be guided by the pragmatics way.

The language is closely related to racial characteristics and a society so as the different lingual habits can be produced by each lingual usage. Because the Japanese natives tend to use the euphemistical expressions, the learner cannot acquire the expressions without learning them. Can one modulate a second language with one's own lingual background? When one learns a second language, it would be essential that one should understand the other's cultures racial traits and histories as a backbone. In my opinion, the linguistic habits in Japan such as ambiguous expressions based on the association of ideas and the ones giving considerations to others are wort! hy of Japanese language itself. In order to master real Japanese, it would be necessary to understand the euphemistical expressions and Japanese cultures and racial traits as well as to practice the conversational skills.

